

渡島大島噴火史料集

津久井 雅志 編

渡島大島噴火史料集

津久井 雅志 編



渡島大島



寛保元年七月十九日大嶋津浪にて津波溢水
溺死大津浪といふ

口絵 1

突符岬からみた渡島大島
(渡島大島から 83 km)

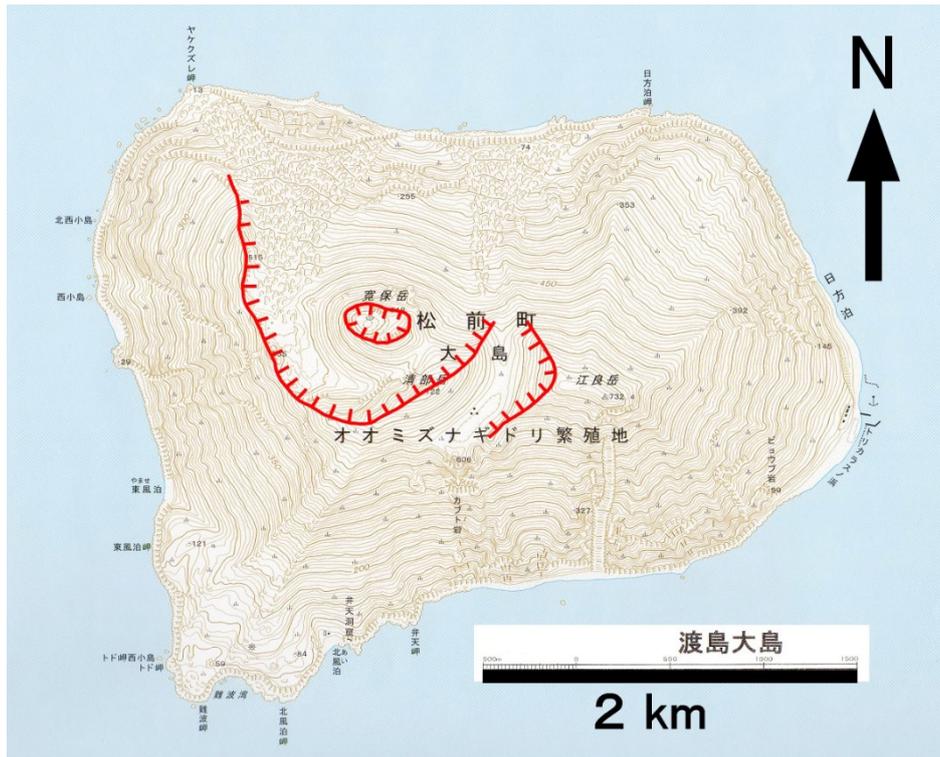
口絵 2

『北海道旧纂図絵』 卷七 函館市中央図書館蔵 より
寛保元年七月十九日大津浪の絵図

八月廿日御用番松平左近將監工松前津浪二付左之
通書付出入
口上覺
松前志摩守領分徒松前東西在々七月十九日未明
津浪打入民家夥鋪流失溺死之者多御座候由石船
杯松前近辺不殘流失破船等多御座候段申越候委
細之義者追而可申上旨申越候先右之趣御届申上
候以上
松前志摩守内
河合九郎兵衛
八月廿日
九月十日松前七月十九日朝津浪之義此間松平左近
將監工届申候上今度溺死破船等之義改松平伊豆守
工月番改指出左近將監工茂指出書付左之通
當月十九日明六時前私領内三十里之間津浪打候
而濱辺住居之者共溺死并流家左之通御座候
千二百三十六人溺死内男八百二十六人女四百十
人外ニ他國者僧俗共二百三十一人溺死
七百二十九軒流家三十三軒潰家四軒流藏二十五
軒潰藏
此節破船仕候舟数大小千五百二十一艘右之内獵
船千三百二十九艘破船仕候此段御届申上候以上
七月
松前志摩守

口絵 3

史料 1 『松前年々記』 永田家文書 (松前町教育委員会蔵複写) 寛保元年八月二十日条・九月十日条。
松前藩から幕府へ届け出た内容の控が記されている。



口絵4

渡島大島の地形。西山の崩壊地形の中に中央火口丘が形成されている。
 国土地理院発行 2.5 万分の 1 地形図「渡島大島」に急崖地形を加筆。



口絵5

松前町中心部。国土地理院発行 2.5 万分の 1 地形図「松前」に寛保当時の地名を加筆。

目次

はじめに

..... 0 1

0 1. 渡島大島寛保元年（元文六年 1741年）活動の概要

..... 0 3

0 2. 寛保元年七月・八月の噴火と津波の発生，被害状況

..... 0 9

0 3. 寛保元年十一月・十二月の地震

..... 1 2

0 4. 寛保元年十二月（寛保二年（1742年））の活動

..... 1 3

0 5. 寛延四年（宝暦元年 1751年）正月の降灰

..... 1 4

0 6. 宝暦九年（1759年）七月の降灰と閏七月・八月の異変

..... 1 4

0 7. 明和三年（1766年）正月津軽大地震と鳴動・噴煙？

..... 1 6

0 8. 明和六年（1769年）正月の降灰と六月旗雲

..... 1 7

0 9. 明和七年（1770年）七月のオーロラ

..... 1 7

1 0. 明和九年（安永元年 1772年）九月の異臭

..... 1 7

1 1. 安永四年（1775年）二月の降灰

..... 1 8

1 2. 安永九年（1780年）正月の異音

..... 1 8

1 3. 天明六年（1786年）正月・二月・三月の降灰

..... 1 8

1 4. 寛政元年・二年（1789・1790年）の噴煙・降灰と鳴動

..... 1 9

1 5. 寛政九年（1797年）噴煙

..... 1 9

渡島大島の寛保噴火・津波関連史料に関する文献

..... 2 0

史料解題

..... 2 2

史料 1. 『松前年々記』 永田家文書

..... 2 7

史料 2. 『松前年々記』 常盤井武宮氏所蔵

..... 2 8

史料 3 - 1. 『御巡見御用要日記』

..... 2 9

史料 3 - 2. 『宝暦十二年 御巡見使應答申合書』

..... 3 0

史料 4. 『松前巡見使應答控』

..... 3 1

史料 5. 『松前津浪之事』

..... 3 1

史料 6. 『津波破損之事』

..... 3 2

参考資料 『蝦夷拾遺』

..... 3 4

史料 7 - 1. 『松前年歴捷徑』

..... 3 6

史料 7 - 2. 『福山秘府年歴部』

..... 3 7

史料 8. 『北海道旧纂図絵』

..... 3 7

史料 9. 『福山舊事記』

..... 3 8

史料 1 0. 『三悦雜記』

..... 3 8

史料 1 1. 『松前方言考』

..... 3 9

史料 1 2. 『松前家記』

..... 4 0

史料 1 3. 『弘前藩庁日記（御国）』

..... 4 1

史料 1 4. 『津軽古事傳記』

..... 5 2

史料 1 5. 『津軽編覽日記』

..... 5 5

史料 1 6. 『葛西秘録』

..... 5 8

史料 1 7. 『封内事実秘苑』

..... 5 9

史料 1 8 - 1. 『永祿日記』

..... 6 1

史料 1 8 - 2. 『梅田日記』

..... 6 1

史料 1 9. 『津軽年代記』

..... 6 3

史料 2 0. 『津軽歴代記類』

..... 6 4

史料 2 1. 『佐藤家記』

..... 6 4

史料 2 2.	『梅田村彦六家記』	6 5		
史料 2 3.	『津軽藩史』	6 5		
史料 2 4.	『油川沿革誌』	6 5		
史料 2 5.	『八戸藩目付所日記』	6 6		
史料 2 6.	『鶏肋編』 <small>(けいろくへん)</small>	6 7		
史料 2 7.	『記事別集』	6 7		
史料 2 8.	『沢内年代記』陸中国和賀郡 総集編』	6 7		
史料 2 9.	『佐渡国略記』	6 8		
史料 3 0.	『撮要年代記』	6 8		
史料 3 1.	『佐渡年代記』	6 8		
史料 3 2.	『西念寺過去帳』	6 9		
史料 3 3.	『碧雲寺過去帳』	6 9		
史料 3 4.	『福井県河野村右近純一家(金相寺)過去帳』	6 9		
史料 3 5.	『年々跡書帳』 <small>(ねんねんあとがきちょう)</small>	6 9		
史料 3 6.	『拾樵雑話 卷二十八 異域』 <small>(しゅうそうざいしごわ)</small>	7 0		
史料 3 7.	『金村家文書』	7 0		
史料 3 8.	『瀧洞歴世誌』 <small>(たきがうろれきせいし)</small>	7 0		
史料 3 9.	『本朝天文志』 <small>(ほんちやうてんもんし)</small>	7 1		
史料 4 0.	『統王代一覽』	7 1		
史料 4 1.	『校正王代一覽 後編』	7 1		
史料 4 2.	『統皇年代略記』	7 1		
史料 4 3 - 1.	『屋代弘賢覚書追加』(『時世録』) <small>(やしやう ひろかた)</small>	7 2		
				史料 4 3 - 2.	『野史櫻町天皇』 <small>(やし)</small>
				史料 4 4.	『統史愚抄 櫻町院下 七十二』
				史料 4 5.	『慶弘紀聞今日鈔』 <small>(けいこうきもんこんにちしやう)</small>
				史料 4 6.	『真澄遊覽記』
				7 4
				7 3
				7 3
				7 2

はじめに

おしまいわらま

渡島大島は、北海道渡島半島の西海岸の50 km あまり西方にある活火山で、東西約4 km、南北約3.5 km、標高732 m (海底からの比高約2300 m)、玄武岩く安山岩質(SiO₂ 47.8~61.7 wt.%)の成層火山である。火山活動は大きくわけて東山外輪山、西山外輪山、中央火口丘の3つの活動期が認められ、東山外輪山、西山外輪山には溶岩流や火砕物からなる円錐状の火山体が存在したと考えられている。地質・岩石学的調査に加えて、文書記録から得られた歴史時代の噴火活動が勝井・他(1977)や勝井・佐藤(1970)などに総括されている。ただし、これらの報告書に引用されている史料のほとんどは編纂史料である震災豫防評議會編(1943a, 1943b)増訂大日本地震史料2巻・3巻によるものであって、史料の成り立ちや所蔵者に関する情報は必ずしも充分ではない。

寛保元年(1741年)には噴火開始一週間後に津波が発生し、対岸の北海道西岸(現在の松前く熊石沿岸)を波高10 mをこえる津波が襲うなど、日本海沿岸地域に大きな被害を及ぼした(羽鳥・片山、1977, 1979; 今村・松本、1988; 今村・他、2002a, 2002b; 都司・他、1996, 2002, 2014など)。松前藩から幕府へ報告した犠牲者数は千四百六十七人であるが、住民・家屋すべて壊滅した集落が多数あること、アイヌや一時滞在者、弘前藩(津軽藩)の犠牲者の多くはこの報告から漏れており、この数字はかなり過少な見積りである。津波の発生原因について、噴火に伴った山体崩壊に原因を求める説(勝井・他、1977)、地震が原因とする説(羽鳥・片山、1977; 羽鳥、1984; 相田、1984など)があったが、崩壊の規模が津波の規模に対して小さい一方で、北海道、津軽などで顕著な震動を感じなかったことから、どちらの説も決定的な証拠を欠いていた。その後、海底地形の調査

から渡島大島の陸上部分だけでなく海底でも崩壊によって形成された地形が確認されたため、津波の原因は、西山の海面上、海面下を含むおよそ2 kmの山体が崩壊したこと、崩壊して発生した岩屑なたれが海に流入したこと、による(佐竹・加藤、2002; 伴・他、2001など)、とするのが最近の定説となっている。

中央火口丘は寛保元年(1741)以降に山体崩壊跡の西山の凹地に噴出した火砕物、溶岩で形成されていると考えられている(勝井・佐藤、1970など)。

本史料集では、寛保元年噴火・津波とそれ以降寛政年間までの火山活動とその推移を復元することに重点をおいて、従来知られていた史料に加え、新たに降灰、灰交りの降雪、硫黄臭に関する記録を収録した(表1)。これらのいくつかは、降灰・悪臭を感知した時の風向が西風であったり(宝暦九年七月降灰、安永元年九月悪臭)、当時松前の大島に由来するといった風説があったなど、渡島大島に由来する可能性が高いと判断した。そのほかにも、給源が明らかでないもの、黄砂を記録した可能性のあるものもあわせて収録した。なお、弘前藩(津軽藩)の地変の記録には弘前に最も近い岩木火山の18世紀(1700年代)以降の噴火が記録されており、その多くが硫黄の自然発火で、実際に見分が行われるなど、活動の観察が確かなものが多い(例えば天明三年二月十日頃)。したがって給源不明の降灰の給源として岩木山は考えにくい。

この史料集を作成するにあたり、できる限り一次史料にさかのぼり、原文を確認した上で、活動全体を理解するよう心がけた(表2)。また、内容の検証のため原史料の所蔵・管理者と翻刻文の出版情報を明示するとともに、史料の背景や成立過程がわかるよう解題をつけた。解題の典拠は個々の史料の解説、北海道大学附属図書館北方資料データベース、弘前大学国史研究会編(2010)「津軽史

事典」，弘前市立弘前図書館編（1970）「弘前図書館蔵郷土史文献解題」などをもとにした。史料整理の過程では複数の史料を対照して誤りの修正，疑問点の指摘を試みているが，すべてを修正しきれていないし，新たなミスを犯しているおそれもある。ご意見，御叱りを受けつつ，より正確なものに近づけたいと考えている。渡島大島の噴火と関連する現象をより深く理解するため，また，防災・減災のための基礎資料としてこの史料集が役立つことがあれば幸いである。

史料をまとめる過程で，多くの方々・機関のお世話になった。

史料の閲覧，複写・撮影にあたり，北海道立図書館，北海道立文書館，北海道大学附属図書館・同北方資料室，函館市中央図書館，江差町郷土資料館，松前町教育委員会，青森県立郷土館，弘前市立図書館，致道博物館，岩手県立図書館，千葉県立図書館，千葉大学附属図書館，国立国会図書館，国立公文書館，国文学研究資料館，東京都立中央図書館，早稲田大学図書館，新潟県立図書館，新潟県立佐渡高等学校同窓会，『撮要年代記』個人所蔵者，永平寺，敦賀市立博物館，そしてそれぞれの担当の方々には親切なご協力を戴いた。油井宏子先生，柏書房小代渉先生には日頃から古文書の読解を指導して戴いている。小代先生には収録した多くの史料の解説にも御教示戴いた。ただし，誤り，不備の責任はすべて編者にある。図の作成にあたり国土地理院のmメッシュ標高，スペースシャトルSRM-3標高データを用いカシ米尔3Dで描画した。

史料集の作成には，平成二十四～二十七年度科学研究費補助金 基盤研究C

(24510245 代表 津久井 雅志)，「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」（課題番号1004 代表 中川 光弘北海道大学教授，および同公募研究課

題番号2626 代表 津久井 雅志（東京大学地震研究所との共同研究）の研究費を使用した。

ご協力戴いた皆様と諸機関に心より感謝いたします。

平成二十八年三月

千葉大学大学院理学研究科

津久井 雅志

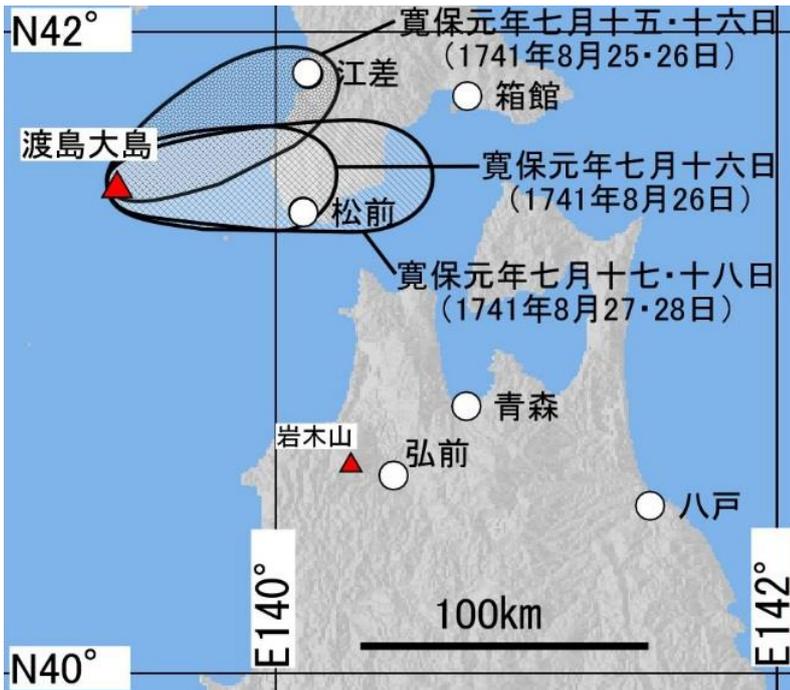


図1 寛保元年七月噴火の降灰分布

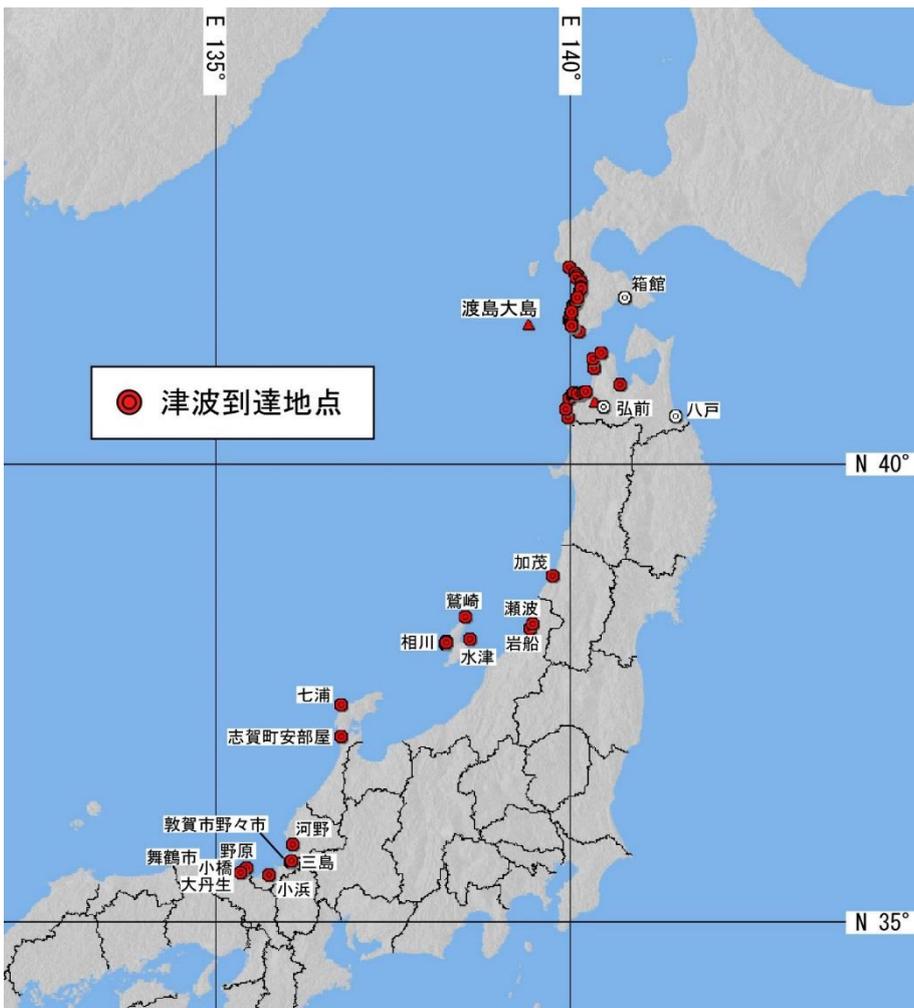


図2 (a) 寛保元年七月十九日の津浪の到達地点

01. 渡島大島寛保元年（元文六年 1741年）活動の概要

渡島大島は北海道松前郡松前町（茂草，清部地区）の西方5.4 kmに位置している。島は東西3.8 km，南北3.2 kmの広がりを持ち，北方へ開いたカルデラ地形が認められる。島民はいない。

寛保元年七月に噴火がはじまり，七月十九日（1741年8月29日）未明に山体崩壊とそれに伴う津波の発生により多数の犠牲者が出た（史料1，6，11，

13）。同年十二月以降北海道や青森県でしばしば降灰が観測された。津波の襲

来地点とその波高については羽鳥（1984），都司・他（1996，2002，2014），今村・他（1998，2002a，2002b），の詳しい報告がある。津波発生の原因については，地震によるという説，山体崩壊による岩なだれが海へ流入したことによるという説があったが，潜水艇による海底地形と海底の観察の結果から海面下も含む山体崩壊が原因である（Sarake and Kato, 2001；佐竹・加藤，2002）と，ほぼ決

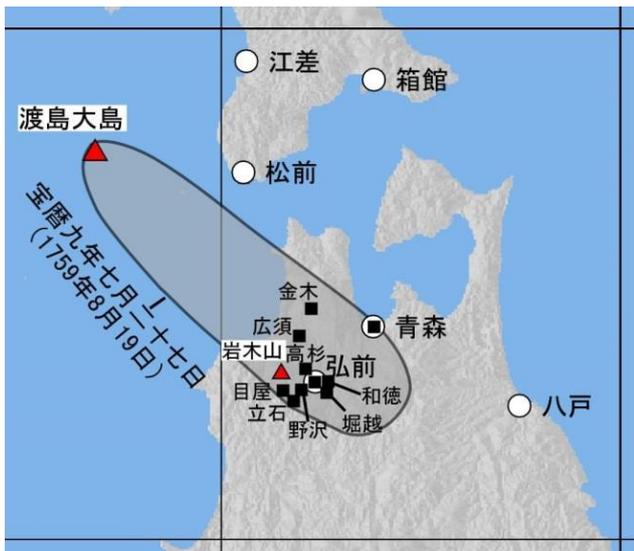


図4 宝暦九年七月二十七日の降灰地点 (■)

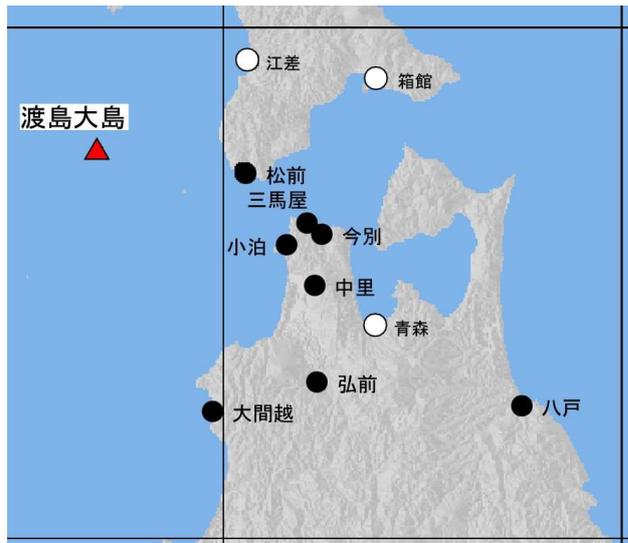


図3 寛保元年十二月から同二年四月までの降灰地点 (●)

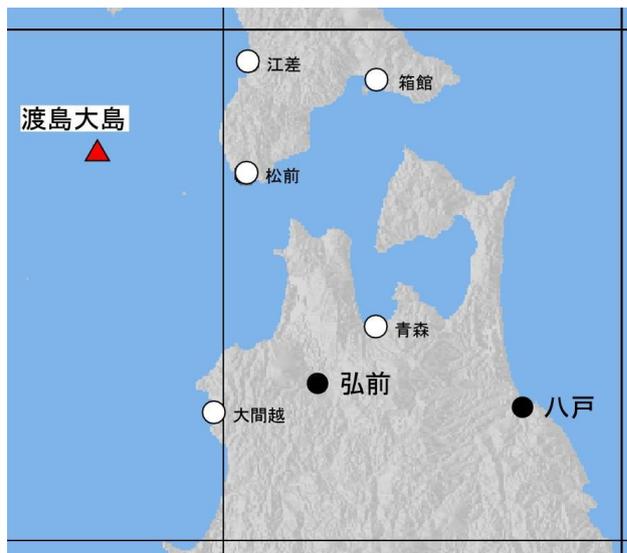


図5 明和九年(安永元年)九月十九日悪臭を感じた地点 (●)

元文五年	史料名	史料番号	史料	
			1	2
七月十五日	史料 1. の 1. の 1. の			
七月二十三日	噴火と津波の記録年の誤りと思われる			
七月八日	弘前八戸地震 噴火開始			
七月十日	弘前八戸地震			
七月十二日	噴火目撃者あり			
七月十三日	噴火			
七月十四日	噴火			
七月十五日	江差降灰			
七月十六日	江差松前降灰			
七月十七日	松前東に降灰			
七月十八日	松前東に降灰			
七月十九日	夜明け頃大津波			
七月二十日	この日まで津波続く			
七月二十三日	史料。の 発信			
七月二十四日	明六時に再度津波			
七月二十五日	夜前回よりは劣る大波が来た			
七月二十九日	朝五ツ時松前江差大津波			
八月一日	弘前津波日記に被害報告			
八月五日	弘前津波日記に被害報告			
八月七日	弘前津波日記に被害報告			
八月十日	弘前津波日記に被害報告			
八月十八日	立石野に卒塔婆を建てる			
八月二十日	松前藩より幕府へ第一報			
九月十日	松前藩より幕府へ第二報			
十一月八日	幕府より松前藩へ照会			
十一月十一日	弘前八戸で有感地震			
十一月十四日	弘前八戸で有感地震			
十一月二十二日	弘前八戸で有感地震			
十二月十日	弘前・八戸で有感地震			
十二月十六日	弘前・八戸で有感地震			
十二月二十二日	二十・二十三日津波で灰交りの雪降る			
十二月二十三日	津波で三、四寸降灰			
正月四日	八戸で前夜降灰			
八戸正月四日	八戸で有感地震			
八戸正月七日	八戸で有感地震			
正月二十日	正月四日以来降灰断続			
二月十五日	八戸で降灰(西風)			
四月十四日	松前・津波で降灰・降毛			
六月二十五日	弘前で卯ノ刻地震			

表1 渡島大島火山寛保元年以降の活動と掲載史料

●：活動記録（活動日）、○：活動記録（掲載日）

史料番号	史料名	寛政九年	寛政二年	寛政元年	天明六年			安永九年	安永四年	（安永元年） 明和九年		明和六年	明和三年	宝暦九年			（宝暦元年） 寛延四年																				
		二月二十二日	十一月	九月二日	四月二十日	三月六日	二月六日	正月二十九日	正月二十二日	正月二十一日	二月七日	九月二十九日	九月十五日	六月十五日	六月九日	正月朔日	二月十二日	二月十日	二月八日	一月二十八日	八月十八日	閏七月十八日	閏七月十七日	閏七月十五日	七月三十日	七月二十九日	七月二十八日	七月二十七日	正月二十九日	正月二十八日	正月二十三日	正月二十二日					
		1797年3月20日		1789年5月14日	1788年4月4日	1786年3月5日	1786年2月27日	1786年2月20日	1780年2月6日	1775年3月8日	1772年10月25日	1772年10月11日	1769年7月18日	1769年7月12日	1769年2月7日	1766年4月7日	1766年3月22日	1766年3月20日	1766年3月18日	1766年3月18日	1759年10月8日	1759年10月7日	1759年9月9日	1759年9月8日	1759年9月6日	1759年8月22日	1759年8月21日	1759年8月20日	1759年8月19日	1751年2月24日	1751年2月23日	1751年2月18日	1751年2月17日				
		異暈天をおおう	地蔵山（松前）鳴動	弘前で降灰	赤神・雨垂石から噴煙望見	次内で晩赤きすな土降	弘前で屋四ツ頃雨交り降灰	午の刻 雪に交じり降灰	降灰（一、二月六日付）	天気よし 巳の刻降灰	西方で掃跡をするような音	晩灰交りの雪降る	弘前で暮六ツ過地震	八戸・弘前で悪臭（西風）月食	史料 ¹ 。六月十四日の記録	旗雲 戌ノ上刻弘前で地震	辰ノ刻弘前で地震二度	降灰	鳴動 渡島大島か不明	鳴動	津軽地方大地震	月赤い	入日赤い	津軽で申ノ刻地震	津軽で山々鳴動	昼夜とも月日光なく赤い	降灰報告	降灰と報告	津軽で降灰	煤ばんだ雪降る	弘前で西ノ刻地震	弘前で西ノ刻地震	弘前で夜丑ノ刻地震				
01	松前年々記（永田家）																																				
02	松前年々記（常盤井家）																																				
03-1	御巡見御用要目日記																																				
03-2	御巡見使應答申合書																																				
04	松前巡見使應答控																																				
05	松前津浪之事																																				
06	津波破損之事則書状之写																																				
07-1	松前年歴捷徑	●	●																																		
07-2	福山秘府 二年歴部																																				
08	北海道旧纂図絵																																				
09	福山善事記																																				
10	三悦雜記																																				
11	松前方言考																																				
12	松前家記																																				
13	弘前藩庁日記			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
14	津軽古事傳記			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
15	津軽編覽日記			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
16	菊西秘録			●																																	
17	封内事案秘苑																																				
18-1	永禄日記																																				
18-2	梅田日記																																				
19	津軽年代記			●																																	
20	津軽歴代記類																																				
21	佐藤家記			●																																	
22	梅田村彦六記																																				
23	津軽藩史																																				
24	油川沿革誌																																				
25	八戸藩目付所日記																																				
26	鶴助編																																				
27	記斐別集																																				
28	澤内年代記				●	●				●																											
29	佐渡国略記																																				
30	攝要年代記																																				
31	佐渡年代記																																				
32	西念寺過去帳																																				
33	碧雲寺過去帳																																				
34	金相寺過去帳																																				
35	年々跡書帳																																				
36	拾雅雜話																																				
37	金村家文書																																				
38-1	田村家文書																																				
38-2	龍洞歴世誌																																				
39	本朝天文志																																				
40	続日本王代一覽																																				
41	校正王代一覽 後編																																				
42	続皇年代略記																																				
43-1	歴代弘賢覺書追加																																				
43-2	野史																																				
44	続史學抄 櫻町院																																				
45	慶弘紀聞今日鈔																																				
46	真澄遊覽記			●																																	

表2 渡島大島寛保元年以降の活動の推移

日付		事項		主な出典	
和暦	西暦(グレゴリオ暦)				
(元文六年) 寛保元年	七月八日	1741年8月18日	14時～15時強い地震、弘前・八戸有感 渡島大島噴火	八戸藩目付所日記、弘前藩庁日記、 御巡見御用要目日記	
	七月十日	1741年8月20日	06時すぎ地震	弘前藩庁日記	
	七月十二日 ないし十三日	1741年8月22日 ないし23日	噴火目撃	御巡見御用要目日記、 津波破損之事則書状之写	
	七月十五日、 十六日頃～	1741年8月25日、 26日頃～	松前西方の村へ降灰。昼も暗く、行燈を ともした。	御巡見御用要目日記	
	七月十六日	1741年8月26日	松前へ降灰	福山秘府、松前年々記	
	七月十七日、 十八日頃～	1741年8月27日、 28日～	松前東方の村へ降灰	松前家記	
	七月十九日	1741年8月29日	未明～夜明、大津波発生、北海道西岸～ 京都府。溺死者1467(松前)、33(津 軽)人、家蔵破壊791戸、大小破船1571 隻(松前藩報告。和人のみ、現住民被 害は含まず)	福山秘府、松前津浪之事、 津波破損之事則書状之写	
	七月二十四日	1741年9月3日	夜明頃、津波発生	松前津浪之事、年々跡書帳	
	八月五日	1741年9月14日	西風、硫黄臭(弘前)	津軽古事傳記	
	十一月十二日	1741年12月19日	06時地震(弘前)、08時2度地震(八 戸)	弘前藩庁日記、八戸藩目付所日記	
	十一月十四日	1741年12月21日	14時地震(弘前、八戸)	弘前藩庁日記、八戸藩目付所日記	
	十一月二十二日	1741年12月29日	夜地震(弘前)	弘前藩庁日記	
	十二月十日	1742年1月16日	10時地震(弘前、八戸)	弘前藩庁日記、八戸藩目付所日記	
十二月十六日	1742年1月22日	黒い降灰、厚さ10cm程積もる(松前)	松前家記、松前年歴捷徑、 福山秘府		
十二月二十二日・ 二十三日夜	1742年1月28日、 29日	灰まじりの雪降る(弘前)	津軽古事傳記、永禄日記、 梅田彦六家記、平山日記		
寛保二年	一月四日夜～ 二十日頃	1742年2月8日夜～ 24日頃	降灰。厚さ10～12cm(弘前)	津軽古事傳記、封内事実秘苑、 平山日記、八戸藩目付所日記	
	二月十五日	1742年3月21日	夜中降砂(八戸)	八戸藩目付所日記	
	四月十四日	1742年5月18日	降灰及び降毛(白・赤、長さ～30cm) (松前)	松前家記、松前年歴捷徑、 津軽古事傳記	
寛延四年 (宝暦元年)	六月二十五日	1742年7月26日	06時地震(弘前)	弘前藩庁日記	
	一月二十二日 ・二十三日	1751年2月17日	02時・18時地震(弘前)	津軽古事傳記、津軽編覧日記	
	一月二十八日	1751年2月23日	18時地震(弘前)	弘前藩庁日記	
宝暦九年	一月二十九日	1751年2月24日	22時～24時降灰(煤ばんだ雪降る；弘 前)	津軽古事傳記、津軽編覧日記、 葛西秘録	
	七月二十七 ～二十八日 八月十七 ～十八日	1759年8月19 ～20日 1759年10月7 ～8日	二十七日暮前から降灰(弘前ほか津軽地 方) 十七日入日・月赤い、十八日朝日赤い (弘前)	弘前藩庁日記、津軽古事傳記、 永禄日記 弘前藩庁日記、永禄日記、 津軽年代記	
明和三年	一月二十八日	1766年3月8日	18時大地震	弘前藩庁日記、津軽古事傳記、 津軽編覧日記	
明和三年	二月十日	1766年3月20日	地震・鳴動(正月二十八日の余震と区別 できない)・西方暗雲(弘前)	津軽古事傳記、津軽編覧日記	
	二月十二日	1766年3月22日	鳴動(弘前)	津軽古事傳記、津軽編覧日記	
	二月二十七日	1766年4月6日	20時すぎ鳴動(弘前)	弘前藩庁日記	
明和六年	一月一日	1769年2月7日	08時～12時頃、降灰(弘前)	弘前藩庁日記、津軽古事傳記、 津軽編覧日記	
	六月九日	1769年7月12日	08時地震(弘前、秋田)	弘前藩庁日記、津軽古事傳記、 封内事実秘苑	
	六月十四日	1769年7月17日	19時地震、22時旗雲(弘前)	弘前藩庁日記、津軽古事傳記、 封内事実秘苑	
明和七年	七月二十八日	1770年9月17日	オーロラ	松前年歴捷徑、 弘前藩庁日記(虫損)	
明和九年 (安永元年)	九月十九日	1772年10月15日	02～12時 焦気(悪臭)(八戸・弘前)	八戸藩目付所日記、 封内事実秘苑、弘前藩庁日記	
	九月二十九日	1772年10月25日	地震(弘前)	津軽古事傳記	
安永四年	二月七日	1775年3月8日	08時～、雪にまじって降灰。黄色に見える (弘前)	弘前藩庁日記、津軽古事傳記、 沢内年代記	
安永九年	一月二日	1780年2月6日	12時～、西方で異音(弘前)	津軽編覧日記	
天明六年	一月二十一 ・二十二日	1786年2月19 ・20日	二十一日10時、二十二日降灰(弘前)	津軽編覧日記、佐藤家記	
	一月二十三日	1786年2月21日	灰まじりの雪降る(弘前)	津軽編覧日記	
	一月二十九日	1786年2月27日	02時前、10時地震(弘前)	津軽編覧日記	
	二月五日	1786年3月4日	朝、降灰(弘前)	弘前藩庁日記	
	二月六日	1786年3月5日	10時、16時雨にまじり灰降る(弘前) 晩、赤い砂土降る(沢内)	津軽編覧日記、津軽古事傳記、 沢内年代記	
	三月六日	1786年4月4日	晩、赤い砂土降る(沢内)	沢内年代記	
(天明九年) 寛政元年	四月二十日	1789年5月14日	噴煙望見(赤神・雨垂石間から)	真澄遊覧記	
寛政二年	九月三日	1790年10月9日	12時～16時降灰(弘前)	弘前藩庁日記	
寛政九年	二月二十二日	1797年3月20日	雲が空を覆う(松前)	福山秘府	

02. 寛保元年七月・八月の噴火と津波の発生、被害状況

(元文六年二月二十七日)「グレゴリオ暦」(1747年4月15日)に寛保と改元

寛保元年七月八日、弘前で「未ノ中刻」(史料¹³『弘前藩庁日記』)、八戸で「八半時」(1747年8月18日)

(²⁵『八戸藩目付所日記』)にかなり強い地震があった。おそらく同じ地震

を記録したのであろう。弘前では「子ノ刻」にも地震があった(¹³『弘前藩庁日記』)。この日ころから渡島大島の噴火が始まったという史料もある

(³⁻¹『御巡見御用要日記』、³⁻²『御巡見使応答申合書』)。

七月十日卯ノ刻過、弘前で有感地震があった(¹³『弘前藩庁日記』)。

七月十二日には、「慥」大嶋焼候儀見届ケ候者有之」と、より確かな目撃情報

が得られた(³⁻¹『御巡見御用要日記』、³⁻²『御巡見使応答申合書』)。

七月十三日には、「大嶋七月十三日ノ焼出し、今以焼とまり不申候、江指

表ハ右之焼砂ふり、当十四五日ハくら闇にて御座候、今日頃にも在々焼砂

ふり申候由を申参候、中々昼夜共少安堵休息成不申候」(⁶『津波破損之事

則書状之写』七月二十三付松前発信)と記録されており、七月十四日・

十五日に江差が降灰により暗闇になった。この書簡が発信された七月二十三

日現在でも降灰の報告が伝えられ、昼夜とも安心して休息できないとされて

いる。「七月十三日より奥州松前の漁なる大島焼る、十五日十六日頃より

昼夜の分ちなくぐら暗みとなる」(¹¹『松前方言考』)という記事も十三日

に噴火が始まったことを示している。

³⁻¹『御巡見御用要日記』には、「西在江指村辺者十五日十六日之頃方焼灰降り、

昼も闇に罷成行燈ヲ明シ申候、松前者十六日昼中方焼灰降り、東在ハ十七日

十八日之頃より降申候、然所、海上鳴渡り、七月十九日明六ツ時前、松前方

西在ハ三拾里之間津浪打來申候、此節地他国男女僧俗共溺死仕候人数千四百

六十七人、此外家蔵も流申候、大船小船共夥敷破船仕候、右大嶋今以焼、

時々鳴候音も相聞風により焼灰も折節降申候、右之趣有増御答可申上候、

と状況が記録されている。江差や西在(松前よりも西く北西の集落)では、

七月十五日に降灰により行燈をつけなければいけない程暗くなった。

翌十六日昼には松前に、十七日・十八日には松前の東在にも降灰があった。

⁷⁻²『福山秘府』によれば、松前では白灰、黒砂が厚さ数寸積もったという。

七月十八日までの降灰分布を図1に示した。

なお、¹⁵『津軽編覽日記』には、元文五年(1740年7月)七月上旬松前大津浪に

て松前中死人四千何百人と申事前代未聞之事之由、其外牛馬、家蔵過半流

失、舟百余艘破船有之、同月八日より松前大嶋焼出、十五日にあく降、

同廿三日相止、とあるが、元文五年の事象とするこの記述を支持するほか

の記録はなく、元文六年の津波を誤って記録したものと判断した。¹⁵『津軽

編覽日記』には寛保元年七月十八日朝に津波による被害の記述があるが、お

そらく日付の誤りで、正しくは十九日であると考えられる。³⁻¹『御巡見御

用要日記』、³⁻²『宝曆十二年御巡見使應答申合書』の成立は宝曆

十一年(1761)なので、この時点でも、今もつて焼け、鳴動、降灰が時折あ

った、ことがわかる。

寛保元年七月十九日の津波に関する記述は、¹²『松前家記』に「十九日大雨海中

大鳴ル明朝ニ至リテ海水漲溢シ根部田ヨリ熊石ニ及ヒ凡三十餘里家ヲ壊ル

七百九十戸船ヲ破ル大小一千五百二十一艘溺死スル者一千四百六十七人」と

あるほか、³⁻¹『御巡見御用要日記』、⁶『津波破損之事則書状之写』(七

月二十三日付) 7.1 『松前年歴捷徑』, 7.2 『福山秘府』, 5 『松前津浪之事』, 1 『松前方言考』, 13 『弘前藩庁日記』, 17 『封内事実秘苑』など松前藩、弘前藩の史料に加えて山形県から京都府にかけての日本海沿岸の多くの地域にある(図2 (a), (b)). 今回の調査で、新たに¹⁴ 『津軽古事傳記』, 庄内の『鶏肋編』, 越後の『記事別集』の記述を得ることができた。

松前藩からの津波発生の正式な報告は八月二十日、九月十日に幕府に届けられた(1 『松前年々記』). 八月二十日の一報では「口上覺 松前志摩守領分 従 松前東西在々 七月十九日未明、津浪打入、民家夥 鋪 流失溺死之者多御座候由、尤 船 杯 松前近辺不 殘 流失破船等多御座候段申越候、委細之義 追 而 可 申 上 旨 申 越 候、先 右 之 趣 御 届 申 上 候、以上、八月廿日」と、津波の発生により大被害があった旨、幕府御用番(老中)松平左近将監乗 邑へ松前藩江戸留守居役河合九郎兵衛から報告された(口絵3).
 (1741年10月19日)
 九月十日の続報で緊急調査による被災状況の概要が月番老中松平伊豆守信 祝へ「松前七月十九日朝津浪之義、此間松平左近将監エ届申候上、今度溺死破船等之義改松平伊豆守エ月番故指 出、左近将監エ 茂 指出、書付左之通、當月十九日明六時前私領内三十里之間津浪打候、濱辺住居之者共溺死并流家左之通御座候。千二百三十六人溺死、内男八百二十六人、女四百十人外、他國者僧俗共二百三十一人溺死、七百二十九軒流家、三十三軒潰家、四軒流藏、二十五軒潰藏 此節破船仕候舟数大小千五百二十一艘、右之内猟船千三百二十九艘破船仕候、此段御届申上候、以上」と提出された(1 『松前年々記』, 口絵3).
 (1741年12月15日)
 十一月八日付で幕府から追加報告の照会があり、回答をした旨の記録があるが、具体的な記述は省かれている。

弘前藩でも¹³ 『弘前藩庁日記(御国)』七月二十日条には「金井ヶ沢湊目付長谷川理助申立候者 今七月十八日、海津浪 三 而 同所湊御番所 潰 申候、(以下の報告 略)」という報告が収録されている。江戸時代は夜明けまでを前日の夜に含めるので、十九日夜明け前のできごとは十八日夜の事象となる。

松前藩内の詳細な被害状況は、『津波破損之事則書状之写』, ¹¹ 『松前方言考』, ¹³ 『弘前藩庁日記(御国)』(十二月二十三日条)にある。⁶ 『津波破損之事則書状之写』は七月二十三日付で松前から発信されたもので、永平寺文書に所蔵されており、函館図書館で複写を閲覧することができる。

¹¹ 『松前方言考』は、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(第七巻「つなみ」と国会図書館所蔵(第一巻「ツナミ」)に収録されている。¹³ 『弘前藩庁日記(御国)』寛保元年十二月二十三日条には、弘前藩家老棟方作右衛門・隈部伊織から松前藩家老の松前内記・下國齋宮・蠣崎内蔵丞に宛てた、七月の津波被害の救援の申し出の書簡と、ともに収録された八月付三馬屋村松前屋長兵衛から一戸徳右衛門・福士弥内へ宛てた被害の覚書が記されている。これらの史料には被災集落名と犠牲者数、被害状況のリストがある。それぞれ独立した調査に基づいており、数字は一致していない(表3)。これらの史料による犠牲者数と現地調査に基づく津波波高が今村・松本(1991)の表3, 都司・他(2002)の表2, 図1にまとめられている。

弘前藩内での被害状況は、『弘前藩庁日記(御国)』の寛保元年七月二十日、(9月3日) (1741年9月10日) (9月15日) (9月19日) 二十四日、八月一日、八月七日、八月十日条に記録されている。八月一日条には、勘定奉行から申出のあった弘前藩内のまとめがある。それによ

表3 『津波破損之事則書状之写』, 『松前方言考』, 『弘前藩庁日記』にもとづく松前の津波被害

	現在地名	場所原記載	⁹ 『津波破損之事則書状之写』	¹¹ 『松前方言考』	¹³ 『弘前藩庁日記』
松前町	福山(松前)	城下・福山泊	船手共約40人あまり	泊川で家60, 船60余流失, 30人ばかり	城下30人, 他船手50~60人
	松前			多数, 数知れず	30人程
	館浜	ネフタ	浸水のみ, 無事	家40余, 30人	
	札前	さつまい	多数		
	赤神	赤神	人は別状無し		
	静浦	あまたれ石	死者多数, 生存者5~6人	家40, 人とも流失	18~19人程
	茂草	茂草	150人余(清部分を含むか)	家20, 20余人	60人程
	清部	幾よ部		家60, 5~60人	130人程
	江良	急ら町	家不残流。死380人	家100, 360人程	370人程, 他旅人80人程
		をこしへ			10人程
		はらくち	多数生存者4~5人	家30余, 人共流失	27人程
	上ノ国町	小砂子	ちいさご		
石崎		石崎	多数	家50, 死者多数, 1名生存	70人程
汐吹		塩吹	山子崎村家, 14~15人	家20, 死者多数	20人程
扇石		扇石	人は別状無し		
木ノ子		きのこ	家・人 別条無し	家30, 死者多数	6人程
(原歌を扇石と誤 るか?)		大きし		家30余, 死者多数	
原歌	原宇田	多数		20人程	
上の国	上ノ国	家人とも別条無し	家60余, 死者多数		
江差町	南浜町	五勝手	4~5人	家20許, 死者多数	
	江差	江差	船手に100人, 陸定住者の死者なし	船70艘流失, 死者多数	7人程, 他に船手180人
	泊	とまり	60人	泊, 田沢50軒, 死者多数	60人程
	田沢	田沢	30人		30人程
	伏木戸	ふしきと	17人		17人程
乙部町	乙部	をとべ	70人余	30軒のうち10軒残, 死者多 家2軒(ないし20軒) ばかり流失, 死者多数	130人程
		もんない, 小茂内		20軒無	8人程
	栄浜	とつふ	人は別状無し		15人程
	三ツ谷	三ツ谷, 三ツ屋	多数	12~13軒皆無し, 死者多数	40人程
	潮見	しひの歌	不明		
	豊浜	蚊柱, 加柱	270人	30軒ばかり, 死者多数	217人程
熊石町	相沼	あい野間	150人	同前(蚊柱と同じ), 死者多数	150人程
	熊石	熊石	400人	50軒余, 死者多数	300人程

ば、藩内(あじがさわ)鯔ヶ沢、小泊、赤石村、柳田村、関村、嶋村、金井沢村、鴨村、田野沢村、晴山村、轟木村、追良瀬村、廣戸村、横磯村、風谷瀬村、三馬屋村領中濱、深浦村、大間越湊支配森山村湊、金井沢湊であわせて死者33名、破船167艘、潰家112軒ほかの被害があった。この他に¹⁴『津軽古事傳記』¹⁵『津軽編覽日記』¹⁶『葛西秘録』¹⁷『封内事実秘苑』²⁰『津軽歴代記類』²⁴『油川沿革誌』にも藩内の津波被害についての記事がある。松前藩、弘前藩以外の日本海沿岸の津波の到達状況は史料26〜38に記録がある。都司・他(1984)は韓国東海岸にも到達したとする記録を紹介している。なお、『笈埃随筆』(百井塘雨著、国立公文書館所蔵・日本随筆大成編輯部編(2007)日本随筆大成第2期第12巻、111-113、吉川弘文館)「海嘯」の項に石見における津波の伝聞による記述があるが、月、時刻に不一致があり、信頼にたる史料ではないと判断し、収録しなかった。

七月二十四日に再び津波が発生した記録がある。⁵『松前津浪之事』。史料には

「其後廿四日明六ツ比^ニ又々津波打候跡も、是ハ少々之事^ニ御坐候、江指^カ村又家数廿五軒流申、家ハ多ク流レ候得共、人ハ三拾人餘相果申候、沖ニ懸り申候舟七拾艘計り御坐候内、五拾八艘破船、残ル十三艘ハ半造作、哀レ成ル躰^ニ御坐候」とあり、十九日の津波に比べるとその規模は小さかったが、江差では、死亡三十余名のほか二十五軒流失、沖懸りの船五十八艘破船、十二、三艘の半壊の被害があった。越前の敦賀の記録³⁵『年々跡書帳』や、菅江真澄の紀行文である⁴⁶『真澄遊覽記』(七月二十五日夜とあるが二十四日の誤りか)にも、十九日とは別の津波があったこと、十九日には及ばないものの、死者が出たほか、家屋、船にも被害があったことが記されている。

文書記録を見る限り、⁶『津波破損之事則書状之写』に七月二十三日付書簡で噴火活動が終息していないことは読み取れるが、降灰の厚さ等の記述はなく、山体崩壊直後の噴火活動は遠方に大量の火砕物を降下させるような噴火様式ではなかったらしい。

八月五日に、弘前で「八月五日西風流(龍巻)磯くさし」と、硫黄臭が感じられた記録がある。¹⁴『津軽古事傳記』。西風とされていることから、渡島大島に由来する可能性が高いと考えられる

八月十八日に、津波による犠牲者を供養する無縁堂が松前の西に位置する「立石野」に建立された。³²『宝曆十二年 御巡見使應答申合書』、⁷¹『松前年歴捷徑地』、⁷²『福山秘府』。現在、松前町字建石にある光明寺境内に供養塔がある(松前市中地圖(文化三年 国文研所蔵、松前町史史料編 第一巻収録)参照、口絵5)。

03. 寛保元年十一月・十二月の地震

十一月十二日、弘前で「卯之中刻」⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』)、八戸で「今五時兩度」⁽²⁶⁾『八戸藩目付所日記』)地震を感じた。

十一月十四日、弘前で「未之中刻」⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』)地震を感じ、八戸でも「八時分」地震を感じた。⁽²⁵⁾『八戸藩目付所日記』。おそらく同じ地震を記録したものである。

十一月二十二日夜に、弘前で地震を感じた(「夜^ニ入辰^ノ刻地震」¹³『弘前藩庁日記』)。

十二月十日、弘前で「巳ノ刻地震時々」(13『弘前藩庁日記』)、八戸でも

「巳ノ刻地震」(25『八戸藩目付所日記』)を感じた。

04. 寛保元年十二月～寛保二年(1782年)の活動

寛保元年十二月から同二年四月にわたり、ほぼ4ヶ月噴火が断続し、松前藩、弘前藩、八戸藩にまで降灰が及んだ(図3)。この間の規模のやや大きなマグマ噴火により、西山で火砕丘が形成され、溶岩も流下する活動があったと推定される。

十二月十六日、松前では空が暗くなって黒い灰が三寸堆積した(「天大曇り黒灰ヲ雨ラシ積ム三寸餘」(12『松前家記』)。同様の記録が7・1『松前年歴捷徑』、7・2『福山秘府』にみられる。

十二月二十二日・二十三日に弘前藩内で降灰があった(「十二月廿二日三日夜、灰交りの雪ふり申し候。」(18・1『永禄日記』、18・2『梅田日記』、22『梅田彦六家記』)。19『津軽年代記』には「〇十二月廿二日、炭交り候雪ふり申候、

是ハ松前焼山故之由」と、起源についての当時の認識についても触れている。

14『津軽古事傳記』には「十二月廿三日津軽中二灰降」と、二十三日の降灰のみが記録されている。

寛保二年正月四日(「八戸曆 寛保二年正月三日」とその後の降灰

14『津軽古事傳記』には「或二正月四日小泊・三馬屋・今別・中里 迄 灰三四寸降」また、25『八戸藩目付所日記』には(八戸藩)正月四日、「昨夜 砂ふり申候付、御祈禱被仰付(略)」、八戸藩の特殊な暦で記されているが、いずれもグレゴリオ暦では1782年2月8日にあたる。渡島大島から見

(三馬屋) 三馬屋、今別の延長方向に八戸があり、弘前藩、八戸藩の独立した史料の降灰分布は整合的である。このほか、「正月四日灰降申候、所二寄深サ三四寸も降候、其後三四度如此」(16『葛西秘録』)あるいは「同日日夜より 廿日

頃迄灰降、厚三四寸、」(17『封内事実苑』)という記録があり、ほぼ同内容の記録が18・1『永禄日記』、18・2『梅田日記』、19『津軽年代記』、22『梅田彦六家記』にある。

一月二十日の降灰については「正月廿日灰降候、在ハ余程、大間越ハ手二取程、右ハ松前大山焼申候由、鉄砂之如二候、」(14『津軽古事傳記』)と一月四日の分布よりも西に降下している。15『津軽編覧日記』と20『津軽歴代記類』の引用元と考えられているこの14『津軽古事傳記』には起源が松前藩領にあること、「黒き鉄砂の如し」と黒色のスコリア質の火山灰であったことを示唆する記述がある。

八戸藩曆正月七日に八戸で「朝五時分少々地震」があった(25『八戸藩目付所日記』)。

14『津軽古事傳記』に「△二月十日朝日二ツ出申候由取沙汰」とある。この状況がどのような現象を意味するのか不明であるが採録した。

寛保二年二月十五日 八戸で記録された25『八戸藩目付所日記』に「二月十五日 西風、夜中砂降」と、降灰(降砂)が記録されている。この日は八戸のみに降灰があり、松前、津軽では降灰記録はない。

四月十四日 松前の記録(12『松前家記』)には「二年壬戌四月十四日灰及ヒ白赤毛ヲ雨ラシ、長サ 尺餘ナル者アリ」と降灰・降毛があり、火山灰に加えて、長さ20～30cmにおよぶ白・赤の火山毛が降ったことがわかる。

7.1 『松前年歴捷徑』^{7.2} 『福山秘府』にも同様の記事がある。津軽では「四月十四日昼四時方八時迄灰降、外濱にメ昼闇也」^(14時) (14 『津軽古事傳記』)とあり、弘前藩「外濱」で10時から14時ころにかけて降灰があったことが記録されている。

(1742年7月26日) (午前06時頃)
六月二十五日、弘前で「卯ノ刻地震」があった⁽¹³⁾ 『弘前藩庁日記』。

05. 寛延四年(宝暦元年 1751年)正月の降灰

(1751年12月14日)
(寛延四年十月二十七日、宝暦に改元)

寛延四年一月下旬に弘前で有感地震があり、一月二十九日には、雪に灰がまじって降った。

(2月18日)
正月二十三日の未明と18時ころの弘前の有感地震が¹⁴ 『津軽古事傳記』に

「同正月廿二日之夜丑ノ刻、翌廿三日酉ノ刻少々宛地震」と記されており、

¹⁵ 『津軽編覽日記』にも収録されている

(1751年2月23日) (18時)
正月二十八日には弘前で「酉ノ刻地震」があった⁽¹³⁾ 『弘前藩庁日記』。

(1751年2月24日) (18時 4分) (18時 4分)
正月二十九日に弘前で「同二十九日亥ノ刻方酉ノ刻少々煤はみたる如き雪

降四五寸程」⁽¹⁴⁾ 『津軽古事傳記』とある。同趣旨の記事が¹⁵ 『津軽編覽日記』に「一 同廿九日亥ノ刻方子ノ刻頃少々さすばみたる様成雪ふる、

右雪四五寸程ふる」とあるので、(文意の整合的な¹⁵ 『津軽編覽日記』の時

刻を採用すると)煤ばんだ雪が、おそらく22時から24時まで降ったので

ある。 ¹⁹ 『津軽年代記』、¹⁶ 『葛西秘録』にも「正月廿九日煤色雪降」と

ある。雪と同時に降った灰は視認しやすいためか、しばしば記録されている。

¹⁴ 『津軽古事傳記』には「又二月九日之朝、月三ツ出候様ニ外瀬村之者儘ニ見たると云、其外雪と風説ス」。月が三つ出たという。¹⁹ 『津軽年代記』には、「越前越後二月赤キ雪降候由」という記録もある。黄砂の可能性もあるが採録した。

06. 宝暦九年(1759年)七月の降灰と閏七月・八月の異変

(1759年8月19日)
宝暦九年七月二十七日夕方から弘前藩内の広い範囲で降灰・降毛があったこと

が¹³ 『弘前藩庁日記』、¹⁴ 『津軽古事傳記』、¹⁵ 『津軽編覽日記』、¹⁶ 『葛西秘録』、

¹⁷ 『封内事実秘苑』、^{18.1} 『永祿日記』、^{18.2} 『梅田日記』、¹⁹ 『津軽年代記』、

²⁰ 『梅田村彦六家記』に記録されている。特に¹³ 『弘前藩庁日記』七月二十七

日条から三十日条には降灰の様子と藩内からの報告が詳しく記録されている(図

4)。

七月二十七日には「申之刻過四方一圓霧ノ如ク曇、酉ノ刻ヨリ夜中灰ふる」とあ

る⁽¹³⁾ 『弘前藩庁日記』七月二十七日条。

二十八日条には「昨晚七ツ時頃る西北之方至而強ク曇大雨之様ニ候之處、雨者一向

降り不申、七ツ半頃る■(土へんに分)土之様成物夜中降、今朝厚サ式三歩位

降積、屋ね其外草木之葉江留り有之、右降候土之色ハ灰之様見へ至而細力

成り、尤夜中降候と相見へ、馬之髪之如く成毛、長サ壹尺五寸位方五六寸位

迄、色ハ栗毛之様成有之、又ハ白キも有之、則日記江結付置之、

一 右■(土へんに分)土之様成物、今朝五時頃少之内晴候處、亦々降、弘前ハ

八時過、少々宛降、在々所ニ寄晩迄降候所有之、所ニ寄降様厚薄有ル、

一 天氣之様子、日者照候得共、右曇ニ覆ひ、朧月などの様にて、終日暮る、八半時頃より南東之方至而強曇申候、

一 當月十七日之頃方一向雨降り不申、照續及渴水候、此二三日朝夕之日至而赤ク、取訊今朝日者赤ク見ヘル、尤入日至而赤シ」

七月二十九日条には、「高杵組大庄や申立候、一昨廿七日七時頃より灰土■（土へんに分）之如く成物降、夜中相止不申、廿八日七ツ時頃迄降申候、右降方村々過分厚薄相見得不申候、高杵村邊より立石村邊ハ少々厚クふり申候、其外高杵組目屋野沢邊まで大部同様御座候、弘前邊方和徳堀越組ハ高杵村方少々薄キ方相見へ申候、作毛ニ差障之儀、今一向相知不申候、外作者障一向無之様奉存候、稲花最中之分者別差障可申候哉、五六日者睨と相知申間敷様奉存候相考、追而可申上旨申出之、五郎左衛門江達之、廣須組大庄屋申立候、一昨廿七日七時方北之方悉曇、嘸雨に可有御座と奉存候処、粉土之様成物降申候而歩行之者目口ニ入候而迷惑仕候、七時頃より今朝四時迄之内、所寄式ニ歩計降り敷申候、別而作毛江差障候様子相見へ不申評判御座稀成事之様皆々申候、則降候物袋入ニ仕、奉入御覽候、此段御注進申上旨申出之、五郎左衛門江相達之、金木組大庄屋申立候、同組同新田之村々、一昨廿七日昼八半時よりあぐ降り、尤所寄五歩位より七八歩位迄ふり申候所も御座候、依之田畑作物模様至而悪敷相見得申候得共、未睨と晴上り不申候故、善悪之義相相知不申候、追々相知次第可申上旨申出之、達五郎左衛門江之、」

七月三十日条「青森在番諸手足輕頭岡文左衛門方以書状申来候者去ル廿七日昼八時過より同廿八日終日、於當所西北曇霧雨之様焼砂降申候、此段申上旨申出之、五郎左衛門江達之、」とある。

これらの記録から、弘前に降灰があつた二十七日の二〜三日前から（何らかの噴出物により大氣中の短波長可視光成分が吸収されて）朝日、夕日が赤くみえた。16時過ぎから周圍に雲がたち、夕暮れ前の17時〜18時ころから灰が降つた。翌二十八日08時頃少し晴れたが、再び降灰があり、14時過ぎまで続いた。灰に交つて馬の鬣のような長さ45〜15cm、栗毛あるいは白い（火山）毛も共に降つた。

藩内高杉組大庄屋からの報告によれば、高杉村辺より立石村辺は少々厚く降灰があり、そのほか目屋、野沢辺までは同様、弘前辺から和徳、堀越組は高杉村に比べ少し薄かつた。廣須組大庄屋の報告によれば二十七日七時より北の方角がここごとく曇り、きつと雨になるだろうと思つていたところ、粉土のような物が降り、歩行者の目口に入つて迷惑した。七時頃より今朝四時迄に、所により6〜9mm程降つた。農作物への影響はない模様であつた。降つた物を袋に入れ、提出した。金木組の大庄屋からは金木組新田之村々には二十七日昼八半時から灰が降つた。所により1.5〜2cm強の厚さがあつた。このため田畑の作物に悪い影響があるように見えるが、また天候が回復していないので、確實ではなく、状況を把握し次第報告する、と伝えられた。

青森では二十七日昼八時過から同廿八日終日、北西方向が曇り霧雨のように火山灰が降つた、と當番で青森に詰めていた諸手足輕頭岡文左衛門が報告してきた（三十日条）。なお、¹⁴『津軽古事傳記』には「七月二十七日暮前灰降、厚サ壹歩

餘、廿八日終日降、大間越辺者^二三四寸も降候由申候、此時天曇り、日月共^二大^ニ赤シ^一とあり、二十七日暮前から降りはじめ、二十八日には終日降った、弘前は壹歩^(1.5cm)(3mm)余り^(1.7)『封内事実秘苑』では「一寸餘^(2.5cm)」、大間越辺には10cmも降ったと記録されている。図4の地図に降灰記録のある主な地名を入れて示した。

宝暦九年閏七月十五日から十八日にかけて、朝日・夕日が赤く見える、地震、鳴動などの事象が¹⁴『津軽古事傳記』(とこれを典拠とする)¹⁷『封内事実秘苑』に記されている。

閏七月十五日「昼夜共^二日月共^二余光無之赤ク見へ」、^(6月6日)「同七月十七日に山々鳴

動致、同十八日方大雨雷、亦申ノ刻少々地震」^(1766年9月9日)、『津軽古事傳記』(14)

「一 同十五日雲立怪敷、昼夜日月色赤く餘光有、^(6月2日)

一 同十七日山々鳴動、月二ツ出、^(6月6日)

一 同十八日同断、日月共^二見ゆ人眼睡す、此日大雨雷、申ノ刻少々地

震、⁽¹⁷⁾『封内事実秘苑』とある。

しかし、¹³『弘前藩庁日記』には(閏七月にはこのような記録はなく)八月十

七日、十八日にほぼ同内容の記事と異臭の記録がある。毎日の記録があり、事象

の記述が詳しい¹³『弘前藩庁日記』の日付が正しく、¹⁴『津軽古事傳記』と、

これを典拠とする¹⁷『封内事実秘苑』が誤っている可能性が高いと考える。

八月十七日「當日の入日至^而赤し」⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』、^(1766年10月4日)

「昨⁽¹⁷⁾夜⁽¹⁷⁾の月殊之外赤し、今⁽¹⁸⁾朝日至^而赤シ、段々霞強し、午ノ刻過より別^(18時)

赤し、日蝕などの天氣の様也、霞強く、なかに随^而猿毛焼様なる匂ひ一圓有

之、申ノ刻過雷時々発ス、酉ノ刻過より雨ニ成ル」⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』

八月十八日条、^(10月2日)

「八月十七日奇怪乃雲立、其夜月之色甚赤ク成、同十八日日之色甚赤ク成、光り少ク平日と違、何ツ迄^ミ候而も不目^ク、眩、假合バ皆既之蝕之様^ニ成候。若是日蝕かと人々曆を開き見候得共、十七人之頃日蝕之可有様なしと人々不思議^ニ覚候。昨十七日月二ツ出、今日八ツ時過月三ツ出候、諸人咄申候。」⁽¹⁸⁾

『永祿日記』、¹⁸『梅田日記』、¹⁹『津軽年代記』、²²『梅田村彦六家記』に同様の記述がある。

07. 明和三年(1766年)正月津軽大地震と鳴動・噴煙?

明和三年正月二十八日酉ノ刻ころに津軽地方で大地震があつた。宇佐美ほか⁽²⁰¹³⁾によれば津軽地方を震源とするマグニチュード^{1.4}とされて

いる本震と、それに続く多数の余震が数ヶ月以上にわたりあり、史料7・1、1

3~19、22に記録されている。明和三年二月十日、十二日、二十八日には地

震、鳴動、黒雲の記録もある。鳴動や黒雲が、渡島大島の火山活動に関連するも

のだと断定はできないが、参考のため収録した。

二月八日に地震があつた⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』、¹⁴『津軽古事傳記』、¹⁵『津軽

編覽日記』、¹⁸『永祿日記』、¹⁸『梅田日記』、¹⁹『津軽年代記』、²²『梅

田村彦六家記』。

二月十日深夜に度々鳴動があり、西の空が黒雲に覆われた⁽¹⁾(○明和三年)同十日^(21月)

申ノ刻過大丸雪降、夜九ツ頃方風吹、度々鳴動、西^ニ黒雲覆、常躰^ニ代る空

色也、同十二日頃静^ニ罷成様^ニ而日夜鳴動数度^ニ成候、⁽¹⁴⁾『津軽古事傳記』、

「同十日申ノ刻過大霧降、今夜子ノ刻風吹少々、度々鳴動いたし、西ノ

方黒雲おゝ平日之空色に是なし」⁽¹⁵⁾『津軽編覽日記』、^(10月10日)「同十日申

刻大雪降、夜九ツ時頃方風吹出、度々鳴動、雲氣常ニ変ル」(17)

『封内事実秘苑』(1)

二月十二日に鳴動があった(「十二日頃静ニ罷成様ニ而日夜鳴動数度ニ成候」(3月22日))

(14) 『津軽古事傳記』, 「同十二日静に両三度鳴動致候、惣而頃日度々地震」(二月)

(15) 『津軽編覽日記』(1766年4月6日)

二月二十七日、弘前で16時過ぎに地震、夜中に鳴動があった(「昨夜西ノ刻過方風立則刻戌ノ刻過ぎ大風、夜中兩三度鳴動、昨昼申ノ刻過地震少」(二月二十七日5時))

(13) 『弘前藩庁日記』(二月二十八日条)

08. 明和六年(1769年)正月の降灰と六月旗雲

明和六年正月朔日「今朝辰ノ刻過雪少々降、則刻止ム、同刻灰のごとく成物少々降、則刻止」(13) 『弘前藩庁日記』あるいは(「○明和六年)同正月朔日辰之刻方午ノ刻迄少々ツ、灰降、雪黒ク人之髮白ク成ル、」(14) 『津軽古事傳記』)および(15) 『津軽編覽日記』に記述があり、08時から正午頃にかけて降灰があり、雪は黒く、髪は白くなったとある。起源については何も触れられていないが、渡島大島の可能性も高いと考え収録した。

六月九日朝五ツ時に強い地震があった(13) 『弘前藩庁日記』, 17 『封内事実秘苑』。秋田でも同様、との記録(14) 『津軽古事傳記』がある。渡島大島との関連は不明である。

六月十四日戌上刻に地震があり(13) 『弘前藩庁日記』六月十五日条, 22時に西から東へ、月の前に「幅三尺程、長さ拾四五間位」の旗雲が出た、という記

事・スケッチ

日記, 17 『封内事実秘苑』。

がある(14) 『津軽古事傳記』, 15 『津軽編覽

日記』, 17 『封内事実秘苑』。

09. 明和七年(1770年)七月のオーロラ

明和七年七月二十八日に日本各地でオーロラが観測された。7・1 『松前年歴捷徑』に「庚寅 七月廿八日下西北有炎光如火白氣立其中央」と記録されているほかに、13 『弘前藩庁日記』, 14 『津軽古事傳記』, 17 『封内事実秘苑』などに記録されているこの夜光、赤い雲は渡島大島の活動に関連するものではなくオーロラだと考えられる。18・1 『永祿日記』, 18・2 『梅田日記』, 19 『津軽年代記』, 22 『梅田村彦六家記』は七月十四日、15 『津軽編覽日記』は七月二十四日の現象として報告しており、日付を誤っている可能性が高い。

10. 明和九年(安永元年 1772年)九月の異臭

明和九年九月十九日、「十九日曉八時頃(一説には前日十八日申ノ刻頃)よりふすほり嗅き香致、煤物腐土ノ焼るニもきこへ候、天明ケテ満天悉ク曇り、黄色ニして赤く、西風少々吹候、風立ハ 弥 右香強く、昼四ツ半過迄右之通大嶋焼る杯其外説計也、」(14) 『津軽古事傳記』, 17 『封内事実秘苑』にも(14) 『津軽古事傳記』を用いた記事がある。14 『津軽古事傳記』と、(臭気については触れていないが) 13 『弘前藩庁日記』には、藩主が猿賀神宮寺に参詣する予定であったが

天気がすぐれないため延期になった、と記されている。25 『八戸藩目付所日記』にも「十九日未明方二天曇、尤ふすほり句ニ霧之如く曇り、西風少々九時



頃方右相止ム、(略)今曉方天氣曇、臭氣有之⁽¹⁶⁾付不怪、神明并法靈⁽¹⁷⁾江御祈禱被仰付、⁽¹⁸⁾と記されている。弘前と八戸の記録は時刻も含めて整合的であり、⁽¹⁴⁾『津軽古事傳記』には臭気は大島に由来する、という風説があったことも書かれている。

九月二十九日(1772年10月25日)に地震があった⁽¹⁴⁾『津軽古事傳記』。

1.1. 安永四年(1775年)二月の降灰

^(1775年3月8日) 安永四年二月七日、^(8時頃)「今辰ノ刻より雪灰交降雪ノ色黄ニ見ゆる」⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』、^(11月)「同七日之晩七ツ過灰交り之雪降申候、雪煤色也、」⁽¹⁴⁾『津軽古事傳記』という記録のほか、岩手県和賀郡西和賀町草井沢で記された⁽²⁸⁾『沢内年代記(草井沢本)』にも(二月七日)「赤雪降る」と書かれている。黄色ないし赤い雪は大陸からの黄砂の可能性もあるが、渡島大島起源の火山灰の可能性もあると考えて収録した。

1.2. 安永九年(1780年)正月の異音

^(1780年2月6日) 安永九年正月二日 昼九ツ過西ノ方⁽¹⁹⁾雷の如之音摺鉢を摺如ク或ハ雪の上を箱雪舟を引音の如ク暫の間鳴申候由、百沢寺⁽²⁰⁾聞申候得は御山の上⁽²¹⁾鳴候様聞得申候由、⁽²²⁾と、西方からの異音を感じたとする記事⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』がある。ただし、他の史料にはみられないこと、御山(岩木山)の上で鳴っているように聞こえるとする記述もあるため、渡島大島との関連は明らかではない。

1.3. 天明六年(1786年)正月・二月・三月の降灰

天明六年正月から三月にかけて降灰を繰り返した記録がみられる。⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』には岩木山を起源とした降灰であるという風説も記述されているが、確実ではなく、渡島大島に関連する可能性もあるため収録した。

^(1786年2月19日) 天明六年正月二十一日10時、翌^(23日)二十二日に弘前で降灰があった⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』、⁽²¹⁾『佐藤家記』。

^(2月21日) 正月二十三日にも「此日午の刻頃濡雪⁽²⁴⁾ふり候処、右雪へあく薄黒く成申候、夫⁽²⁵⁾

⁽²⁶⁾ 晴候て、暮頃方亦々終夜五寸程位ふり申候、」⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』と正午ころに降った雪を灰が薄黒くしたことが観察されている。

^(2月27日) 正月二十九日、02時前と10時頃の二度、弘前で有感地震があった⁽¹⁾「今曉寅の刻前并今日巳の中刻両度地震致候」⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』。

^(2月4日) 二月五日朝、弘前で降灰があった⁽¹³⁾「今朝少之内降灰、」⁽¹³⁾『弘前藩庁日記』。^(25日) 二月六日10時ころと夕方、弘前で雨に交じって降灰があった。⁽¹⁴⁾『津軽古事傳記』、⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』、⁽²¹⁾『佐藤家記』、岩手県和賀郡西和賀町草井沢

の⁽²⁸⁾『沢内年代記(草井沢本)』に以下のように記録されている。

⁽²⁷⁾「七ツ頃灰降候由申候、雪少々赤ミ有之候、」⁽¹⁴⁾『津軽古事傳記』

(二月)「六日昼四ツ頃雨降、其雨の中へ灰ましり降申候、是ハ正月廿二日より

灰多く降、頃日まで折々降雪くろミ申候、右は皆岩木山より吹おろし候風にて、⁽²⁹⁾ゆわうの焼候灰飛ちりふり候にて可有之と人々申候、」⁽¹⁵⁾『津軽編覧日記』

記』

(天明六年二月)「同六日 灰降、」⁽²¹⁾『佐藤家記』

二月六日晚赤き砂土⁽³⁰⁾ふる、」⁽²⁸⁾『沢内年代記(草井沢本)』。

さらに²⁸『沢内年代記』には天明六年三月六日にも「三月六日晚赤きすな土降」

という記録がある。三月六日の記録は二月六日と同様の記述であるため日付を誤って重複して挙げた可能性があるが、他の史料がなく検証できない。

14. 寛政元年・二年 (1789・1790年) の噴煙・降灰と鳴動

⁴⁵『真澄遊覧記』には、寛政元年四月二十日に赤神・雨垂石から噴煙を望見した記事がある。この記事を震災豫防評議會編 (1941b) 3巻は寛政二年四月

二十日の記録として採用し、勝井・他 (1977)もそのまま引用している。しかし、

菅江真澄の松前西岸の行程は正しくは寛政元年四月～五月なので、噴煙活動の記事は「寛政元年四月二十日」に訂正する必要がある。

寛政二年九月二日、弘前に降灰した記録が¹³『弘前藩庁日記』、¹⁴『津軽古事

傳記』、¹⁵『津軽編覧日記』、¹⁶『葛西秘録』、¹⁹『津軽年代記』、²¹『佐藤家

記』にある。¹³『弘前藩庁日記』の記述は(九月二日)「今日午刻頃方灰降、申ノ刻

前止、申ノ刻雨則刻止、午刻頃方曇」、また¹⁵『津軽編覧日記』には(寛政二年

九月)「同月二日朝五ツ半過頃方灰降、四ツ過方西北の方曇り、薄赤ク遠方火事

の様子に見得候処、段々灰降り七ツ時迄降、夫方少之間小雨ふり、夫方灰降

事相止、往来の人之目に入難儀、其上衣類も白ク成候、草の葉付候灰は雨ふり

候得ハ、土をこね候而葉へ付候様見へ申候、灰は甚細かにて物にうけ見候へハ、

所²より二三歩之厚サにたまり申候由、近年雪中にはいふり夫²已前にも七月灰

降り申候、近年灰ふる事是にて三度²御座候」とあり、09時過ぎないし12時

ころから16時前まで灰が降り、6～9mmほど降った。通行人の目・口に入っ

て難儀したり、衣服にかかって白くなる程であったことが記されている。

寛政二年十一月に(松前の北側背後にある)地蔵山が鳴動したという記録⁷

『福山秘府』がある。地蔵山は間⁷前の北側背後の地蔵堂のある山だと考えられるが、渡島大島に関連する「鳴動」か、現時点では不明である。

15. 寛政九年 (1797年) 二月噴煙?

寛政九年二月二十二日「異暈蓋^レ天」という記録⁷『福山秘府』がある。これも渡島大島の異変を示すものか不明であるが、収録した。

渡島大島の噴火全般・関連史料の解説に関する文献

- 相田勇 (1984) 噴火により発生する津波の見積り：1741年渡島大島の場合. 東京大学地震研究所彙報, 59, 519-531.
- 伴一彦, 高岡一章, 山木滋 (2001) 数値シミュレーションによる1741年(寛保元年)津波の波源モデルに関する考察. 津波工学研究報告 18, 131-140.
- 羽鳥徳太郎, 片山通子 (1977) 日本海沿岸における歴史津波の挙動とその波源域. 地震研究所彙報, 52, 49-70.
- 羽鳥徳太郎 (1979) 北海道渡島大島津波(1741年)の供養碑. 地震研究所彙報, 54, 343-350.
- 羽鳥徳太郎 (1984) 北海道渡島沖津波(1741年)の挙動の再検討. 地震研究所彙報, 59, 115-125.
- 羽鳥徳太郎 (1999) 能登半島における津波の屈折効果. 地震 第2輯, 52, 43-50.
- 弘前大学国史研究会 編 (2010) 津軽史事典. 468p.
- 弘前市立弘前図書館 編 (1970) 弘前図書館蔵郷土史文献解題. 弘前図書館, 100p.
- 今村文彦, 松本智裕 (1998) 1741年渡島大島火山津波の痕跡調査. 津波工学研究報告, 15, 85-105.
- 今村文彦, 大窪慈生, 伴一彦, 高岡一章, 三宮明, 山木滋, 小林英次 (2002a) 津軽半島周辺での寛保渡島沖津波の再調査：津軽藩御国日記の追加による詳細調査. 津波工学研究報告, 19, 1-40.
- 今村文彦, 大窪慈生, 伴一彦, 高岡一章, 三宮明, 山木滋, 小林英次 (2002b) 『津軽藩御国日記』の追加による寛保渡島沖津波(1741)の詳細調査. 歴史地震, 18, 166-175.
- 勝井義雄, 佐藤博之 (1970) 地域地質研究報告5万分の1地質図幅 渡島大島. 説明書. 地質調査所. 16p.
- Katsui, Y., and M. Yamamoto (1981) The 1741-1742 activity of Oshima-Oshima volcano, North Japan. Journal of Faculty of Science, Hokkaido University, Series IV, Geology and Mineralogy, 19, 527-536.
- 勝井義雄, 横山泉, 江原幸雄, 山下済, 新井田清信, 山元正継 (1977) 渡島大島——火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策——. 北海道における火山に関する研究報告書第6編, 北海道防災会議, 82p.
- 気象庁 編 (2013) 20. 渡島大島. 日本活火山総覧(第4版) I. 北海道・東北編. 317 - 326.
- 佐々木竜男, 片山雅弘, 富岡悦郎, 佐々木清一, 矢沢正士, 山田忍, 矢野義治, 北川芳男 (1971) 北海道における腐植質火山灰の編年に関する研究. 第四紀研究, 10, 117-123.
- Satake, K. and Y. Kato (2001) The 1741 Oshima-Oshima eruption: extent and volume of submarine debris avalanche. Geophysical Research Letters, 28, 427-430.
- 佐竹健治, 加藤幸弘 (2002) 1741年寛保津波は渡島大島の山体崩壊によって生じた. (総特集 津波研究の最前線(2)過去の津波の事例研究)——(津波発生伝播過程の物理検証)号外海洋, 28, 150-160.

- 震災豫防調査會編 (1904) 『大日本地震史料 甲巻』・震災豫防調査會, 595p.
- 震災豫防調査會編 (1918) 『日本噴火志 上編』・震災豫防調査會報告, 86, 236p.
- 震災豫防評議會編 (1943a) 『増訂 大日本地震史料 第2巻 自 元禄七年 至 天明三年』・771p.
- 震災豫防評議會編 (1943b) 『増訂 大日本地震史料 第3巻 自 天明四年 至 弘化四年』・945p.
- 鈴木正章, 村田泰輔, 西村裕一, 吉田真理夫, 宮地直道 (1998) 渡島大島 1741
テフラと寛保津波の堆積物の諸特性, 日本地理学会発表要旨集, 54, 288-289.
- 東京大学地震研究所編 (1982) 『新収日本地震史料 第三巻 自宝永元年(1704) 至 天明八年(1789)』・961p.
- 外岡慎一郎 (2013) 越前・若狭の歴史地震・津波へ年表と史料, 敦賀論叢, 27, 31-70.
- 都司嘉宣, 白雲燮, 秋教昇, 安希洙 (1984) 韓国東海岸を襲った地震海溢, 月刊海洋科学, 171, 527-537.
- 都司嘉宣, 上田和枝, 佐藤貴史, 西畑剛, 佐藤一敏 (1996) B5 寛保元年 (1741) 渡島大島噴火津波の発生原因, 日本火山学会講演予稿集 1996(2), 81.
- 都司嘉宣・西畑剛・佐藤貴史・佐藤一敏 (2002) 寛保元年(1741) 渡島大島噴火津波による北海道沿岸での浸水高さ (総特集 津波研究の最前線(2) 過去の津波の事例研究) — (古文獻による歴史津波の研究)・号外海洋 (28), 15-44.
- 都司嘉宣, 岩瀬浩之, 原信彦, 久保田徹, 吉田剛次, 松岡祐也, 佐藤雅美, 芳賀弥生, 今村文彦 (2014) 寛保元年(1741) 渡島大島噴火, 宝暦 1-2年(1762) 佐渡近海地震, および天保 4年(1833) 出羽沖地震に伴う津波の佐渡での浸水
標高, 津波工学研究報告, 31, 215-252.
- 宇佐美龍夫, 石井寿, 今村隆正, 武村雅之, 松浦律子 (2013) 日本被害地震総覧: 599-2012. 東京大学出版会, 694p.
- 山田忍 (1958) 火山噴出物の堆積状態から見た沖積世における北海道火山の火山活動に関する研究, 地団研専報, 8, 40p.
- 『蝦夷拾遺』(『津波破損之事則書状之写』の参考資料) 佐藤玄六郎著, 青島俊藏, 庵原宣方, 佐藤行信, 皆川秀道, 山口高品編, 北海道大学附属図書館北方資料室 (web公開), 札幌市立図書館 (web公開), 国会図書館, 早稲田大学 (web公開) 蝦夷拾遺 天明六年 写本 (函館市中央図書館 解題) 二次資料: デジタル資料館 天明五年 幕命により蝦夷地を探索した幕吏佐藤玄六郎・青島俊藏・山口鉄五郎等一行が記した報告, 天明六年佐藤玄六郎の漢文体の序文あり, 翻刻: 大友喜作編 (1972) 『蝦夷拾遺』, 北門叢書 第1冊, 国書刊行会, 410p.

史料解題

史料1. 『松前年々記』 永田家文書, 松前町教育委員会に複写あり(登録番号0195). 寛保元年八月二十日条に松前藩江戸留守居役河合九郎兵衛から御用番(老中)松平左近将監(乗邑)へ報告した口上覚, および九月十日条に松前藩主松前志摩守(邦廣)から月番(老中)松平伊豆守信祝と松平左近将監へ届けられた正式の報告が収録されている. 翻刻: 松前町(1974)松前町史 史料編1, 51-90.

史料2. 『松前年々記』 常盤井武宮氏所蔵. 北海道立文書館にマイクロ資料(F-2/347)あり. 著者不明. 慶長元年(1596)から元文六年(1741)の記事. 明治四十年(1907)4月, 常盤井秀太による写本.

史料3-1. 『御巡見御用要用日記』 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(旧記0338, web公開). 宝暦十一年(1761)成立. 昭和五年江差関川家蔵書より毛筆写. 宝暦十一年六月, 幕府巡見使工藤瀬兵衛の来着に際し, 松前藩が準備した江差および西在各村の寺社沿革, 戸数人口, 宗門改, 鉾山その他に関する回答要旨の写(北海道大学附属図書館北方資料室 web解題による).

史料3-2. 『宝暦十二年 御巡見使應答申合書』 函館市中央図書館所蔵(資料番号1810662591). 宝暦十一年(1761)成立. 史料3-1と同じく宝暦十一年の幕府巡見使の到来に際し, 松前藩が領内の寺社沿革, 戸口, 産業その他について回答を準備したもの. 翻刻: 松前町史・史料編1, 395-410.

史料4. 『松前巡見使應答控』 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(旧記630 web公開). 寛永十年(1633)より天明八年(1788)までの幕府巡見使の

一覧を掲げ, それぞれの時期における家数, 寺社等についての応答を記す. 天明八年御巡見松前江御下向御案内書(文化七年写)を合綴. 場所請負人村山伝兵衛写(北海道大学附属図書館北方資料室 web解題).

史料5. 『松前津浪之事』 福井県永平寺所蔵. 函館市中央図書館に複写あり.

史料6. 『津波破損之事』 福井県永平寺所蔵. 函館市中央図書館に複写あり.

史料7-1. 『松前年歴捷徑』 北海道立文書館所蔵(旧記1228), 函館市中央図書館所蔵(資料番号1811248226), 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(旧記0642 web公開). 寛政十一年(1799)頃成立. 松前藩の略年譜.

寛政十一年幕府による東蝦夷地の上知まで記す.

史料7-2. 『福山秘府二年歴部』 源廣長編. 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(旧記0539(2))および(旧記333(2)道写本)(どちらもweb公開).

安永九年序(1780)松前家の一族で同藩随一の学者であった廣長が, 当時現存した公私の記録および諸書をもとに編纂した分類別の松前藩史料集成. 翻刻: 北海道庁(1937)新撰北海道史第五卷, 1-81.(復刻版清文堂出版(1991))(北海道大学附属図書館北方資料室解題による). 卷之六(寛保元, 二年記事を含む)は現存, 卷之七は欠. 翻刻文は『松前年歴捷徑』で補っている(北海道大学附属図書館北方資料室web解題).

史料8. 『北海道旧纂図絵 七』 松前廣長撰, 北見伝治校訂. 函館市中央図書館所蔵(資料番号1810664119). デジタル資料館web公開.

史料9. 『福山舊事記』 国立国会図書館所蔵(『福山旧事記(松前旧事記)』(請求記号231-77, 原本大体記号YD-古-2451マイクロフィルム). 文治五年から文政六年までの記録.

史料10. 『三悦雜記』^{(三悦(さんえつ)雜記)} 函館市中央図書館所蔵(『柏木三悦雜話』資料番号1810664761)・安永九年 写本。

史料11. 『松前方言考』 蛭子吉蔵(淡齋如水)著。北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(第七巻 旧記0648(7))web公開, 国会図書館所蔵(第一巻 請求記号140-237, 原本大体記号YD-古-3028 マイクロ)・嘉永元年(1828)成立。幕末箱館の町人学者蛭子吉蔵が著した松前言集(北海道大学附属図書館北方資料室 解題)。「つなみ」の項に寛保津浪の被害状況が記されている。

史料12. 『松前家記』^{(松前(まつまへ)家記)} 三 新田千里編。北海道大学附属図書館北方資料室所蔵(旧記617(3))web公開, 函館市中央図書館所蔵(蠣崎文庫 資料番号1810666774)・明治十一年(1877)成立。松前藩祖武田信廣より明治四年の廃藩置県までの松前藩の年表的な編年誌。筆者は維新期の藩の急進的指導者で正議局長(北海道大学附属図書館北方資料室 解題)・翻刻: 松前町(1974) 松前町史 史料編一、19-24。

史料13. 『弘前藩庁日記(御国)』 弘前市立図書館所蔵。弘前藩庁における寛文元年(1661)から元治元年(1864)までの藩政に関する記録。『御国日記』3297冊、『江戸日記』1218冊、津軽藩政の基本史料。

史料14. 『津軽古事傳記』^{(津軽(つがる)古事傳記)} 今通磨著。弘前市立図書館に七巻, 青森県立郷土館に二十巻所蔵。今通磨(〜1808)が寛正(1460〜)年間から寛政三年(1791)まで、当時の旧記のほとんどから採録して、しかも私見を加えないもので、『封内事実秘苑』もこれによっている(「津軽史事典」による解題)。

史料15. 『津軽編覽日記』^{(津軽(つがる)編覽日記)} 木立要左衛門著。弘前市立図書館所蔵(YK215-93-1〜13)・寛政四年(1792)三月に藩の命によって、木立要左衛門(1726〜1801)

が日記物書 成田寅之助ほかの協力を得て編集、翌寛政五年二月にその稿が成ったもの。全十三巻、翻刻: 木立要左衛門著・畑山信一訳(2011)津軽編覽日記(対訳)第1冊: 為信公御代日記, 第2冊: 信牧公御代日記・信義公御代日記, 第3冊: 信政公御代日記上。弘前図書館。

史料16. 『葛西秘録』^{(葛西(かさい)秘録)} 葛西清雄編。弘前市立図書館所蔵(GK210 14)・文化十三年(1816)成立。津軽の開祖から享和三年(1803)までの編年史(「津軽史事典」による解題)。

史料17. 『封内事実秘苑』^{(封内(ほうない)事実秘苑)} 工藤源左衛門行一著。弘前市立図書館所蔵(『封内事実苑』: 『工藤家記』の別名あり。全三十三巻(K215/47/1〜33))碓ヶ関町奉行・青森町奉行を勤めた工藤源左衛門行一(1785-1846)が『津軽古事傳記』を土台に編集した為信から順承までの津軽藩の編年史(「津軽史事典」による解題)。

史料18. 1. 『永禄日記 乾』作者不詳。翻刻: 山崎立朴編(1956)『永禄日記』。青森県文化財保護協会編。みちのく双書第1集。青森県文化財保護協会。25. 板柳館野越の史料。永禄元年(1585)から安永七年までの民間の記録で、他書に見られない記事が多く、藩政を外から見たものといえる。異本が多い(「津軽史事典」による)。

史料18. 2. 『梅田日記 下』 弘前市立図書館所蔵(YK 215 160)・永禄日記の異本の一つ。

史料19. 『津軽年代記』 原蔵者不明。東京大学史料編纂所に写本あり(請求番号2041.21-2.『当所年代記』三)請求番号4140.1-9.『平山日記』ともweb公開。弘前市立図書館所蔵(『平山日記』四)YK215-88-4)五所川原市

湊の平山家の家記で元亀元年(1570)から享和二年(1803)までを記録。農業・経済史研究の好史料。翻刻：青森県文化財保護協会編(2010)青森県みちのく双書 第32集 『平山日記』 614p。(復刻版)

史料20. 『津軽歴代記類 第二巻』 藤田貞元・兼松成言・樋口建良・楠美晚翠・下沢保躬ほか編。国文学研究史料館所蔵(22 B 107〜2)。明治政府太政官からの命により作成。明治十年刊。翻刻：青森県文化財保護協会編(1959)みちのく双書 第7集 『津軽歴代記類 上巻』青森県文化財保護協会。294p.

史料21. 『佐藤家記 四』 弘前市立図書館所蔵(KK215 サト 4)。寛保〜宝暦年間は欠。

史料22. 『梅田村彦六家記』 奥瀬清簡編(1980)『本藩旧記 上』歴史図書社、249p.による。浪岡の史料。

史料23. 『津軽藩史』 工藤主善(他山)著。工藤主善著(1891)『津軽藩史 乾』外崎覺 卷之四、44p.による。工藤主膳(1818-1889)は津軽藩の家臣の家に生まれた藩士、学者、教育者。津軽藩初代藩主 為信公の時代より最後の藩主承昭の時代まで津軽藩の歴史を編年体で綴った。国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開。

史料24. 『油川沿革誌』 大瀬熊三郎編(1892) 油川沿革誌 101p. 国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開。36p.に寛保津波の記事収録。

史料25. 『八戸藩目付所日記』 八戸市立図書館所蔵。翻刻：森越良編著(1999, 1999, 2004) 解説 八戸藩目付所日記、寛保元年(70巻)、寛保二年(71巻)、安永元年(101巻)。

史料26. 『鶏肋編』^(けいりくへん) 庄内藩士加藤正從編、^(まさよむ) 致道博物館所蔵(本編84冊、

深秘部7冊、目録1冊、計92冊)。著者の加藤正從は庄内藩士。古文書を集めた父の正識のあとを継いで、文化三年(1806)四月編さんに着手、天保五年(1834)十一月まで調査・執筆した。庄内藩酒井氏のみならず、庄内の旧主武藤・上杉・最上の三氏の記録も掲載されている。正從は文化二年(1805)藩校致道館の創建と共に、司書を命ぜられた。翻刻：山形県編(1961)『鶏肋編 下』、山形県史 資料篇 第六、巖南堂書店。908p.

史料27. 『記事別集』 翻刻：磯部順軒著、今泉省三・真水淳編(1977) 『記事別集 順軒記事』、越佐叢書 第十二巻、78-80。野島出版。376p.による。

史料28. 『沢内年代記』 陸中国和賀郡 総集編『沢内史談会編(2000) 沢内村教育委員会。180p. 『沢内年代記』は、岩手県和賀郡西和賀町で伝承された年代記。1673年(延宝元年)から1900年(明治33年)まで記録されている。記録者は不明、いくつかの異本がある。旧湯田町草井沢に伝わる「草井沢本」は、気象、地震、農作に関する記事が詳しい。

史料29. 『佐渡国略記』 新潟県佐渡高等学校同窓会所蔵(舟崎文庫)、国文学研究資料館に寄託。翻刻：新潟県立佐渡高等学校同窓会(1986)『佐渡国略記 上巻 第一巻』佐渡高等学校同窓会。p685。p425。

史料30. 『撮要年代記 壹』 個人蔵。国文学研究資料館に複写あり。翻刻：山本修之助編(1973)『撮要佐渡年代記』佐渡叢書 第四巻、148-151。佐渡叢書刊行会。271p.

史料31. 『佐渡年代記 卷三』 新潟県立図書館所蔵(請求記号000/115 デジタライブラリーで公開、152/196 ページ、151 ページ「寛保三年」は乱丁で

- 158ページと同じもの。国文学研究資料館所蔵（鶴飼文庫 96-4941-21。web公開）。慶長六年より嘉永四年に至る間の奉行所の記録。翻刻：佐渡郡教育会編（1935）460p。国会図書館近代デジタルライブラリーでweb公開 331 - 332p.
- 史料32. 『西念寺過去帳』 石川県志賀町の記録。羽鳥徳太郎（1999）に収録。
史料33. 『碧雲寺過去帳』 石川県門前町七浦（しちのうら）の記録。翻刻：石川県七浦小學校同窓会編（1920）七浦村志。細川敬文社。国会図書館近代デジタルライブラリーでweb公開。外岡慎一郎（2013）。
- 史料34. 『福井県河野村右近純一家（金相寺）過去帳』 外岡慎一郎（2013）に収録されている。
史料35. 『年々跡書帳』（ねんねあとがき帳）（敦賀市市野々）柴田一男文書。敦賀市立博物館所蔵。外岡慎一郎（2013）に収録されている。
史料36. 『拾椎雑話』 卷二十八 異域』福井県小浜市における記録。木崎正敏著、国会図書館所蔵（請求記号 188-549）。翻刻：法本義役校訂（1974）。拾椎雑話・稚狭考。福井県郷土誌懇談会。
史料37. 『金村家文書』舞鶴市小橋、野原の記録。翻刻：舞鶴市史。通史編（上）、1096p。外岡慎一郎（2013）。
史料38. 『瀧洞歴史誌』（たきがたのれきし）田村家文書。舞鶴市瀧ヶ字呂、田村家の6代、270年間にわたる記録。翻刻：舞鶴市史。通史編（上）、1096p。
史料39. 『本朝天文志』（ほんちやうてんもんし）西村遠里編。国会図書館所蔵（請求記号 205-158。原本代替記号 YD-10-547 マイクロフィルム）。天明元年自序あり。
- 史料40. 『続王代一覽 三』片山円然「松斎」編，東大史料編纂所所蔵（請求記号 440.117）。web公開。国立公文書館所蔵（内閣文庫 請求番号 139-0029 ほか複数写本あり）。文化元年五月序。
史料41. 『校正王代一覽 後編 卷二』高田義甫，西野古海編，大関克校。千鍾房ほか（1874）校正王代一覽 龍頭插画 後編 卷二上、39丁。国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開。
史料42. 『続皇年代略記』小野高潔（1747-1829）撰，早稲田大学中央図書館所蔵（請求記号（リ05 02587）web公開 96/124 P.）。
史料43-1. 『屋代弘賢覚書追加』屋代弘賢著。宮内庁書陵部所蔵（飯田忠彦編『毫埃 三十九』（ひょうがい）に収録。島根正黨，『時世録』を引用）。幕府奥右筆を勤めた屋代弘賢（1758-1841）が編纂した。翻刻：文部省震災予防評議会，増訂大日本地震史料，第二巻。356p。国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開。
史料43-2. 『野史』（やし）第十六巻 本紀 櫻町天皇』源（飯田）忠彦（嘉永四年（1851））著。国会図書館所蔵（請求記号 W197-N3）。翻刻：飯田忠彦修・飯田文彦訓点・竹中邦香校（1882）『野史 第七 第十六巻 本紀 櫻町天皇』國文社。国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開。49-50/55 P.。
史料44. 『続史愚抄 櫻町院 下 七十二』柳原紀光編。国立公文書館所蔵（史料目録名は『続史愚鈔』（請求番号 138-0082））。江戸時代の公卿・歴史家であった柳原紀光（延享三年〜寛政十二年（1746〜1800）による正元元年〜安永八年（1259〜1779）の編纂記録。全八十一冊。翻刻：経済雑誌社編（1905）

- 『統史愚抄』 国史大系 第3巻 経済雑誌社, 521p. 国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開 (請求記号 210.08-Ko548-Kk 284/468 コマ).
- 史料45 『慶弘(けいこう)紀聞(きもん)今日鈔』 安田照矩編 (1874), 国会図書館所蔵 (『十三朝紀聞 卷之第四・五』, 請求記号 210.5-Y1387Z). 国会図書館近代デジタルライブラリーweb公開 (37/65 コマ).
- 史料46. 『真澄遊覧記』 菅江真澄著, 翻刻: 菅江真澄著 (1971) 日記 菅江真澄全集 2巻, 未来社, 496p.

史料1. 『松前年々記』永田家文書（松前町教育委員会複製所蔵）

（寛保元年（元文六辛酉年三月三日改元））

七月十九日 於松前、明六時前三十里之間津浪打申候

（略）

八月廿日 御用番松平左近將監工津浪ニ付左之

通書付出ス

口上覺

松前志摩守領分 從 松前東西在々 七月十九日未明、

津浪打入、民家夥 鋪流失溺死之者多御座候由、尤 船

杯 松前近辺不 殘流失破船等多御座候段申越候、委

細之義者追而可申上旨申越候、先右之趣御届申上

候、以上

松前志摩守内

八月廿日

河合九郎兵衛

九月十日 松前七月十九日朝津浪之義、此間松平左近

將監工届申候上、今度溺死破船等之義改松平伊豆守

工月番故指出、左近將監工 指出、書付左之通

當月十九日明六時前私領内三十里之間津浪打候

而濱辺住居之者共溺死并流家左之通御座候、

千二百三十六人溺死、内男八百二十六人、女四百十

人、外他國者僧俗共二百三十一人溺死、

七百二十九軒流家、三十三軒潰家、四軒流藏、二十五

軒潰藏

此節破船仕候舟数大小千五百二十一艘、右之内獵

船千三百二十九艘破船仕候、此段御届申上候、以上

七月

松前志摩守

（略）

十一月八日 從 松平左近將監渡辺宗右衛門工書付ニ

而志摩守家来相尋候様ト申達候、松前津浪之義先達

而書付出候得共余リ有増候間、自 此方相尋候書付之

通其外委細書付出可旨依之家来牒面ニ張紙致シ

指出申候、右書付共別扣有リ

注

松平左近將監は御用番（老中）松平左近將監 乘 邑（1686 - 1746）

松平伊豆守は月番老中松平伊豆守信 祝（1683 - 1744）

松前志摩守は松前藩主松前志摩守 邦 廣（1705 - 1743）

河合九郎兵衛は松前藩江戸留守居役

史料2. 『松前年々記』常盤井武宮氏 所蔵(北海道立文書館マイクログ資料)

(元文)

(元文六寛保元)

六 辛 酉年七月十七日地震之様ニ度々相聞ヘ大鳴ニ候由、十六

日夜中ヨリ十七日之明マテ城下及部 迄 一面ニ焼灰

降申候上在下在共降候由、所ニヨリ七八分壺寸程

マテ降り候由、十九日西風ニテ天气能、明前ヨリ雨降り

海上 夥 敷 鳴渡リ、無 程明迄之内津浪打来リ、

前浜之潤掛リ之船不残一時ニ打揚、浜並之家

共潰家半潰家共ニ有之候、三鑄丸船ハ大松前

町役所之下迄打揚、大松前橋ハ欄干付候俣

ニテ馬 坂橋之上エ打揚、同橋ヘ能代船式百石

計リノ船入申候、浜通ノ家ヘハ玉餘魚タナコ

杯 入候、エゲフ畑中ヘハ磯魚色々ノ貝類浪ニ

打揚、淤泥ノ内ニ有之候、札前村ヨリ熊石村

マテ村々溺死都合千三百七十人余、百姓旅

人共ニ家数准之、新谷ヨリ吉岡村迄十九

軒疵家二十軒溺死十六人、右ノ通公儀ヘ御

断アリ、

注 口絵5 参照

及部 松前城の東1.7 kmにあつた集落

大松前役所 松前城の東にあつた役所

大松前橋 松前城南東にあり、大松前川にかかる橋

馬坂橋 松前城東にあり、大松前川にかかる橋、海岸から約300メートル

エゲフ 松前町旧生符

新谷村 松前郡松前町荒谷か

吉岡村 松前郡福島町吉岡

史料3・1. 『御巡見御用要用日記』 北海道大学附属図書館北方資料室 所蔵

「寶曆拾一^(1761年)辛巳歲

御巡見御用

關川
藏書

要用日記

五月 吉祥日

一 津浪之事御尋御座候ハ、左之

通可申上候

一 寛保元^(西)年七月八日之頃^(より)方 大嶋

焼申沙汰有之候処^(たしか) 二十二日 慥

二 大嶋焼候儀見届ケ候者有之、

西在江指村辺^者 十五日十六日之

頃方焼灰降り、昼も闇に罷成

行燈ヲ明シ申候、松前^者 十六

日昼中^方焼灰降り、東在ハ

十七日十八日之頃より降申候、然

所、海上鳴渡り、七月十九日明六

ツ時前、松前^方西在ハ三拾里

之間津浪打來申候、此節地他

国男女僧俗共溺死仕候人数

千四百六十七人、此外家蔵も

流申候、大船小船共ニ夥敷破

船仕候、右大嶋今以焼、時々鳴

候音も相聞^江風により焼灰も

折節降申候、右之趣有増御答

可申上候、

史料3・2. 『宝曆十二年 御巡見使應答申合書』 函館市中央図書館 所蔵

一 寛保元酉年七月八日ノ頃ヨリ大嶋焼申沙汰

有之候処、十二日 慥(たしか)ニ焼候儀見届候者有之、西

在江差邊ハ十五日十六日焼灰降り、昼夜中焼

灰降り、東在ハ十七日十八日ノ頃ヨリ降申候、

然処海上鳴度リ七月十九日明六ツ時前西東

三十里ノ内津浪打来申候、此時自他國男女僧

俗共ニ溺死仕候人数左之通り、

千四百六十七人此外家蔵モ流申候、大船小舟

共ニ夥敷破船仕候、右大嶋ハ今以時々鳴ル音

モ風ニ寄り相聞へ、折節焼灰モ降り申候、右之

趣有増ニ御答可申候、若 委細ニ成サル、事モ

有之候者々猶松前町書付仕差上可申旨可申

上候事、津浪ヨリ今年迄二十一年

(略)

一 無縁堂 立石野

右ハ寛保元酉年七月十九日之津浪ニテ溺死

人有之ニ付回向諸寺院ヨリ申立ニテ延享

三丙(1786)年立石野庵室建立当年マテ十六年、

注 立石野 無縁堂：現在の松前町字建石 光明寺境内に供養碑がある

(口絵5参照)

史料4. 『松前巡見使應答控』 北海道大学附属図書館北方資料室 所蔵
古事記

(略)

一 寛保元酉年七月十四日ヨリ大嶋焼出し、同月

十九日朝六ツ時、松前城下ヨリ西在熊石村迄

津波^三而男女人数式千人余流死いたし候、

家数^者七百軒余流レ申候 ○文化七年迄及七拾九年

史料5. 『松前津浪之事』 永平寺所蔵文書

松前津波之事

寛保元年辛酉八月

記之、去月十五日昼九ツ比^ニ

松前江指^卷方^{三十里}卅里計り沖^ニ大嶋

と言所有、此地方出火烟ずな

ふり、日夜わけなく候^ニ付、昼

夜火をともし罷有候所^ニ其後

十九日明六ツ時^ニ其嶋焼くすれ、

其勢^三而大津波打、村数式拾

三ヶ村流し、人数凡ソ式千

八百人相果申候、段々其村之内

方廿人卅人相助り申者御坐候、

大津波高サ一丈五尺計り、所々

方五丈六丈^ニ成申候、其後廿四日明

六ツ比^三又々津波打候跡^也も、是

ハ少々之事^三而御坐候、江指村又^卷

家数廿五軒流申、家ハ多ク流レ

候得共、人ハ三拾人餘相果申候、

沖^ニ懸り申候舟七拾艘計り御坐候

内、五拾八艘破船、残ル十二三艘

ハ半造作、哀レ成ル躰^ニ御坐候、

史料6. 『津波破損之事則書状之写』永平寺文書

寛保元年^{辛酉}七月十九日

津波破損之事、則書状之写

- 一 城下^{三而}つふれ申家貳拾貳軒、懸り船七拾艘はかり居合申候
- 一 不残打上ケ用立不申候、死人ハ船手共^三四拾人あまり、
- 一 ねふた村家々へ浪打込申はかり^{三而}別条無之候、
- 一 さつまい^(札前)村家不残流、村中大方なかれ死失申候、
- 一 赤神村家数半分ほとなかれ失、人は別条無之候、
- 一 あまたれ石村家不残流、村中不残死、残もの五六人はかり、^(茂草)
- 一 もくさ村不残なかれ、村中死人百五拾人余、
- 一 江良町村家不残なかれ、村中死人三百八拾人、
- 一 原口村家不残流、村中生残候者

漸四五人、

- 一 石崎村家人共不残なかれ失、跡方もなし、
- 一 山子崎村家不残なかれ、死人ハ拾四五人はかり、
- 一 扇石村家数半分過^(續れ)けかれ候へ共、人ハ別条なし、
- 一 木の子村家人共^三無別条候、
- 一 原哥^(原歌)村家人共流失、行形もなし、
- 一 上ノ國村家人共^三無別条候、
- 一 五勝手村家三ヶ壺つふれ、死人は四五人はかり、
- 一 江指寺^(江差)小屋方詰岸迄ノ内四拾軒はかり流、濱通り土蔵大方流れ、残ルハつふれ申候、かゝり船八十艘ノ内七拾式艘破船仕候、荷所船ノ内^三紙屋権兵衛殿
- 一 鳴崎弥三郎殿
- 一 右二艘かゝり留り申候、又山田三大夫殿材木積^三参り候由^{三而}破船仕候、死候者舟手共^三百人余、陸^三てハ過分死人も無御座候、

- 一 泊り村家不残なかれ、死人六拾人、
 - 一 田沢村家数四五軒残、死人三拾人余、
 - 一 伏木戸村家数五六軒残、死人拾七人、
 - 一 乙部村家不残流、死人七拾人余、
 - 一 (突符)とつふ村家四五軒なかれ、人は別条無之候、
 - 一 三谷村両所^三而家^二軒残り、其外皆々流れ失申候、
 - しひの哥家老軒のこり、皆々なかれ失、死人不知、
 - 一 蚊柱村家不残なかれ失、
 - 一 死人式百七拾人、
 - 一 相^(相沼)ノ間村家五六軒残り、
 - 一 熊石村^(つと)ノ方家拾軒計残り、其外は不残なかれ、凡死人四百人余、
- 有増右之通にて御座候、いまだ騒動最中にて御座候得^者
- しかと相知れ不申候、右之外山中ノ内、上磯ハ関内方貝取小船参り候^而船人共^二だいなし、

- 上魚地はふとろ、せた内込右の津なミいたし候様^二承り申候、
- 寸^(寸っ)津^方上ハ別条無御座候由、
- 頃日舟参り候故承り申候、
- 下在ハ右之津なミ福しま限り^二御座候、殊^ニ少々問屋すき方にて御座候、
- 吉岡には舩式艘うちあけ候へ共、舟別条無之、家内へ浪打こミ申候よし、其外下在ハ別条無之候中^ニも浪強く打上ケ候所ハもくさ村^(茂草)よりはらくち村^(原口)迄殊外成大浪^三而高き山の上までうちあけ申候由にて御座候、扱々目も当られぬ有様^二て御さ候、毎日
- 在々ノはま死人ノ山をつき申候、
- 大嶋七月十三日方焼出し、今以焼とまり不申候、江指表^(江巻)ハ右之焼砂ふり、当十四五日ハくら闇にて御座候、
- 今日頃にても在々焼砂ふり申候由を申参候、中々昼夜共少^茂
- 安堵休息成不申候、此度ノ大津なミ、右大しまノ焼故とさた仕候、かた^二難儀なる事^中々筆

紙ニつくしかたく御座候、荒まし

如此御座候、以上

寛保元年

七月廿三日 松前方

注

雨垂石は（現松前町字静浦）の沖にある大岩

参考

『蝦夷拾遺』（天明六年）佐藤玄六郎著

元之卷

地理大概上

島形は蜻蛉（とんぼ）に化せんとする水蠶（やこ）の曲れるに似て〔原註、時珍本艸に曰、水蠶

好く變化「蜻蛉」状蠶に似て手足の短きもの也。〕首の如く突然と出たる地を白紙崎と云。

〔原註、シラカミ崎より津輕郡三馬屋の渡凡五六里 背は則北にしてソウヤの界盡、尾は丑寅に流れて終をシレトコと云。 都て周廻七百餘里。 松前はシラカミ崎

に覆はれ、北に曲り南に向て、山海の間屋舎有り〔原註、松前にて北極星を見るに地を出る事四十一度五分餘、ソウヤに至ては四十五度〕

志摩守家臣及び寺院を除、商家一千五百餘戸、人數六千三百餘人、春の末より晩秋に至るまで、諸國の商舶來て海岸に湊り、日夜陸に通じて市をなす。

松前に次者

根部田村 餘家十戸不足
二十餘人

札前村 家十餘戸
四十餘人

赤神村 十戸不足
二十餘人

雨垂石村 十戸不足
二十餘人

茂草村 二十餘戸
七十餘人

清部村 四十餘戸
百四十餘人

江長町村	百戸不 _レ 足 百八十餘人	原口村	十戸不 _レ 足 三十餘人
小砂子村	二十戸不 _レ 足 九十餘人	石崎村	六十戸不 _レ 足 百八十人不 _レ 足
羽根若村	十戸不 _レ 足 四十人不 _レ 足	山子崎村	十戸不 _レ 足 十餘人
鹽吹村	五十戸不 _レ 足 百五十餘人	扇石村	十餘戸 六十餘人
木ノ子村	六十戸不 _レ 足 百二十餘人	原歌村	十戸不 _レ 足 十餘人
上之國村	二百十餘戸 三百七十餘人	喜多村	九十戸不 _レ 足 三百六十餘人
大留村	六十餘戸 二百三十餘人	五勝手村	百戸不 _レ 足 三百五十餘人
江差村	千餘戸、三千五百餘人、此地も諸国の商船來り湊ふを松前に等し	泊村	百九十餘戸 二百餘人
尾山村	二十戸不 _レ 足 三十人不 _レ 足	田澤村	八十戸不 _レ 足 二百三十餘人
伏木戸村	三十戸不 _レ 足 百餘人	厚澤部村	二百三十餘戸 九百餘人
五輪澤村	十戸不 _レ 足 十餘人	乙部村	二百五十戸不 _レ 足 八百二十人不 _レ 足

小茂内村 五十餘戸
百五十餘人

大茂内村 四十戸不_レ足
百三十人不_レ足

突府村 二十餘戸
八十人不_レ足

三谷村 四十戸不_レ足
百三十人不_レ足

蚊柱村 六十戸不_レ足
二百人不_レ足

相沼内村 百戸不_レ足
二百十餘人

泊川村 九十餘戸
百三十人不_レ足

熊石村 百八十餘戸
六百餘人

小島 茂艸村の沖凡三里餘に有り民屋なし、周圍二十町に不_レ足

大島 江長町村より西北の沖凡五里に有り周廻二里餘、民屋なし、常に吐煙

以上松前より西北に有り、熊石村より松前へ陸路二十六里餘。

(以下略)

注 この記録は幕府勘定奉行松本伊豆守秀持の命により天明五・六年に巡檢した際の佐藤玄六郎による記録。松前藩の集落の戸数、人口の記載がある。また渡島大島が「常に吐煙」状況であつたことがわかる。

史料7・1. 『松前年歴捷徑地』 北海道立文書館 所蔵

辛酉 寛保 (略)

七月西部大島発火、震動如大山之

崩、天又雨白灰黒沙積地上深^者数寸、同月十九

日下寅雨降、海洋為響須^(しゅゆ)臾明、且海水忽^(溢)隘^之海邊

都為海、里程凡三十有餘里溺死者一千四百六

十七人、家庫破壊^者七百九十一戸、破船大小一

千五百二十一隻、夷方溺死者併家庫小舟破^者

不載于、此至八月演白之于 江戸是月建無縁

堂于立石野、冬十二月天陰炭降、平地積三寸餘

天晴^而地為黒雪、是歲移轉龜田衛所於函館宇

須岸、

壬戌

一^(寛保)夏四月十四日、天雨灰、灰中赤白長毛交降、長

七八寸或有尺有餘者、

(略)

丙戌

三^(明和) 正月廿八日酉大地震、

(略)

庚寅

七^(明和) 七月廿八日下西北有炎光如火白氣立其中央、

(略)

庚戌

二^(寛政) 十一月地藏山鳴動、

三^(天明)

(略)

丁巳 ^(寛政) 九

蓋天、

二月二十二日異暈

注 明和七年七月廿八日は広い範囲でオーロラが観察されたと考えられており、
渡島大島の活動との関連の可能性は低いと考えられる。

史料7・2. 『福山秘府二年歴部 六』北海道大学附属図書館北方資料室 所蔵
(寛保元辛酉年)

○秋七月十六日、西部大島発火、震動如大山之崩、亦雨白

灰黒砂積地上深_者數寸、

史料8. 『北海道旧纂図繪 七』函館市中央図書館 所蔵 (口絵1)
寛保元辛酉年七月十九日、大嶋発焼して洋海溢水
溺死、大津浪といふ、

○同月十九日寅下雨降、海洋為響須臾至明、且海水大溢

海邊都成海、其里程凡三十有餘里、溺死者一千四百六

十七人、家蔵破壊_者七百九十一戸、大小船破_者一千五

百二十一隻、夷方溺死者及家蔵小船破_者不載于、此至

秋八月二十日演白之于江戸

續松前年々記說畫于此

○秋八月十八日因僧徒之乞_而於立石野修行施餓鬼建

卒都婆、壬戌之歳建玄石堂無縁堂

○冬十二月十六日天陰炭降平地積三寸餘、大晴_而地皆

為黒色雪、

○是歳移轉龜田邑衛所于函館、

(略)

(寛保二壬戌年)

○松前廣候記曰、夏四月十四日天雨灰々中赤白長毛交

下長七八寸或有尺有餘者、

史料9. 『福山舊事記』 国立国会図書館 所蔵

寛保元年七月十九日朝七ツ時下刻、西在根符村よ(根部世)
り熊石村まで津浪打て家蔵流る、人民千余人溺死、大
嶋焼け灰毛降る、昼ハ闇夜の如く数度有之、津浪一同
なり、城近辺ハ家少々痛、熊石村迄見分として牧村忠
太、明石軍七兩人遣す、

史料10. 『三悦雑記』(さんえつざっぎ) 函館市中央図書館 所蔵

未聞津波の咄(ミモンツナミ (はなし) ヌレキカ)
寛保元西の七月十九日明方、松前城下より上ハ熊石邊迄大津波にて、
男女老少忒千人余溺れ死ス、江差の濶懸り舩、舟寫の後口より波打
越し破損、乗人も死ぬ、都て松前御領ハ七月廿日迄盆心にて踊有リ、
十九日夜中ハ汐の干ル事夥しく、江差濶懸り舩大小共に干潟に(ヒカタ)
居りしことくにてありけると也、然共未聞の事故、津波寄せべし共、
人心付ず居たるよし、果して夜明方、右の通りの大變なり、惣て
承よりハ汐夥しく、乾ル時ハ油断すへからず由申傳へける、心得べし、

史料11. 『松前方言考七』 北海道大学附属図書館北方資料室 所蔵

つなみ

海水あふれて陸にわたるをつなみと云ふ、

考るに津波と書よし、津ハ字書にわたる或ハ

うるをひと訓せり、又津しハ。あふるゝなりと

見へたり、昔ハ吾か松前に度々ありし由云ひ

傳ふれとも、己ハ未た其災に会ハねハ知らさ

りしか、

倭年代皇紀首頭云、寛保元年辛酉七月十三日

より奥州松前のイ 漁なる大島焼る、十五日十六

日頃より昼夜の分ちなくイ 暗く、ら暗みとなる、皆

人怪み恐る、十九日の暁七ツ時よりつなみ起

り来る、其高さ二丈余りもありしか、松前の家

数ハ八百余軒流れて死人数をしらす、泊川村

家六十軒、船大小六十余艘行方知らず三十人

計死す、松前より二里ねふた村家四十余流れ

て溺死三十人、ふイ ねたより一里もくさ村家二

十余廿余人流る、もくさより一里あまたれ石

村家四十軒ハかり人共に行衛知れず、あまた

れ石より一里イ さまよ江村家六十軒五六百人死

す、きよへより半里江 島江ら町村家百軒ハかり三

百六十人程死す、江ら町より三里はらくち村

家三十軒余人ともなし、はらくち村より三里いし

さき村家五十軒ハかり人も流る、只一人其中

にて助かる、いしきよより半里しほふき村廿

軒ハかり家人共になし、しほふきより八丁き

の二村三十軒ハかり家人共になし、きのこよ

り十丁大し村三十軒余大しより上国村

六十軒余家人共に行衛を知らず、上国より二

里五勝手村二十軒ハかり家人共に見へず、五

勝手村より一里江 島江指凡六百軒余の津なり、船

大小百三十艘の内七十艘ハかり見へず、死人

ハ数を知らず、江指より一里泊、田沢村にて五

十軒ハかり人も皆流さる、泊、田津より二里乙

部村三十軒の内十軒程残る、家ハかり有りて

人ハ見へず、乙部村より一里もんない村二軒イ 二十軒

ハかり人共になし、もんないより半里突府二

十軒ハかりなし、全村より半里三ツ谷村十二

三軒皆なし、全村より十丁蚊柱村三十軒ハか

り皆なし、全村より相沼内村全前なり、全村よ

り熊石村五十軒余人ともなし、此外奥筋幾千

万と云ふを知らず、七月十九日明方の津波に

て一時に集せ来りし故に、夢の間に流れ失た

る家数人イ 数類あけて数へ難し、其後ハ風も一切

になしとぞ、

按るに是ハ大島の道焼て海に崩れ入りし故

に、一時に崩れたる方へ潮のあふれしにやと

思ハる、然れトモ己思ふにハ、津波と云ふも潮汐

の盈虚(えいきょ)の變にやと思ハる、今つなみにうしほ

の説を挙く、

(略)

史料12. 『松前家記』(第三卷)

北海道大学附属図書館北方資料室所蔵

寛保元年辛酉正月廿八日暇ヲ賜フ、

四月三日帰藩ス、七月十六日大島

鳴動、火ヲ噴キ灰砂交々降り晦冥夜

ノ如シ、十九日大雨海中大ニ鳴ル

明朝ニ至リテ海水漲溢シ根部田

ヨリ熊石ニ及ヒ凡三十餘里家ヲ

壊ル七百九十戸、船ヲ破ル大小一

千五百二十一艘、溺死スル者一千

四百六十七人、蝦夷地方モ亦此災

ニ罹リ家船ノ破壊民夷ノ死亡擧

テ數フヘカラス、八月十八日光善

寺ノ住持 某(圓郭) 請フテ無縁堂ヲ建テ

溺死人ヲ弔フ、十二月十六日天大

ニ曇リ黒灰ヲ雨ラシ積ム三寸餘、

是歳亀田ノ衛所ヲ函館ニ遷シ始

メテ函館奉行ヲ置ク

(寛保)
二年壬戌四月十四日灰及ヒ白赤

毛ヲ雨ラシ、長サ尺餘ナル者アリ、

史料13. 『弘前藩庁日記（御国）』 弘前市立図書館 所蔵

寛保元年

七月八庚午日 快晴 未ノ中刻地震余程強、子ノ刻地震則止

(略)

七月十壬申日 曇 終日雨、入夜卯ノ刻過地震

(略)

七月十九辛巳日 陰晴 午ノ中刻過風雨甚、則刻止、西之濱小泊邊迄津浪

(略)

七月二十壬午日 陰晴

(略)

一 金井ヶ沢湊目付長谷川理助申立候者

今十八日之夜、海津浪三而同所湊御番

所潰申候、御見分可被仰付哉之旨作右衛門江

達之、見分申付旨書付三而勘定奉行江

申遣之、見分之義者作事奉行江も、

一 赤石組代官申立候者晴山村・田野沢村・

嶋村・鴨村・金井ヶ沢村・関村・柳田村・

桜沢村・赤石村右九ヶ村三而今十八日之

夜、海津浪押シ上、家五六拾押シ潰

申候、金井ヶ沢湊御番所押シ潰申候、右

村々之内三而人拾四五人、馬茂死申候旨

作右衛門江達之、死人等夫々見分之上

片付候様申付之、見分目付之義大目付江も申遣之、

一 鱒ヶ沢湊目付申立候者今十八日磯津浪、

松前舟三艘破舩仕候、其外舟少々痛

申候得共、乘人痛無御座候旨作右衛門江

達之、

一 瀧野沢牧頭齋藤茂左衛門申立候者御牧

父馬清水相煩候付、御馬醫罷下り

療治仕候様被仰付度旨作右衛門江達之、

一 赤石組、金木組津浪之由注進付、作右衛門

達之、為見分赤石組江成田傳八・金

木組江者菊地十藏罷下候様申付之、

一 金木組代官申立候者、小泊村今十九日明

六時より大津浪、村中大概五六拾軒

程押潰申候、人馬も多怪我御座候、

一 懸舩・漁舩・小廻等茂多痛損御座候、

一 村近所塩釜不残潰申候、

一 四方大分痛損御座候、

右之通御座候得共、其邊品員數相改候

無御座候付、先御断申上候旨作右衛門江

達之、

一 鱒ヶ沢町奉行申立候者今十九日磯津

浪^三而御船蔵痛損申候、

一 旅小船三艘破船仕候、其外地舟共^三上廻リ損申候、乘人別条無御座候、

一 當年五歳子共老人流失申候、右之通

申出候付、作右衛門^{江達之}、

(略)

七月二十四丙戌日 快晴

(略)

一 御馬廻長谷川理助申立候者私義金

井ヶ沢湊相勤罷有候處、今十八日夜津浪^二而

御番所御用物并諸道具共^二流捨、上下共

助り、山^江引取罷有候旨作右衛門^{江達之}、

(略)

一 赤石組代官申立候者

一 流死男老入 金井ヶ沢村茂右衛門子 万太郎

右^者當月十九日大浪^三而右村々^三而

流死拾三人有之内、右万太郎死骸

上り、長内次右衛門去ル廿二日見分相済

片付申候、殘拾式人死骸上リ次第御断

可申上候間、其節御見分被仰付度旨

作右衛門^{江達之}、

(略)

一 今別町年寄小鹿喜右衛門申立候者

去ル十九日明七半時、松前御城下枝ヶ

崎町より下町不殘流失仕候由、尤舟ハ

海陸^三而夥々敷痛潰れ申候由、人^者岡^三而

三拾人、舟^三而拾人死申候由、

一 餌差町^{江卷}より御城下^江廿日之夜飛脚

到来付、左之通申参候由承申候、

一 餌差町^江寄せ候津浪、十八日之夜八ツ

時^三而同町跡先流失仕候、死人は夥々敷

候得共、人数^者何百人と申義、睨と相知

兼候由、

一 餌差湊^三而舟百式拾艘居候處、百五

艘^者潰れ、拾五艘残り申候由、尤相果候

人式百餘人御座候由、

一 熊石村邊在々小村不殘流失^三而殘候

家式拾軒、人三拾人残り申候由、其外

死候人凡九百餘人と承申候、

一 御城下より下^者吉岡、上^者餌差町迄

相知候由、夫より下^者尻内・龜田・箱館迄

之内未善悪之様子相知不申由、大方

人数凡四千余人相果候由、右^者志摩守様

御手船之舟頭山田清七と申者御舟も

此度津浪^三痛損候由付、三馬屋^江

舟雇罷越申候由^二昨廿一日渡海仕候付、

私方より手代共差遣、前書之通

承候間、右之段御注進申上候旨申出之、

作右衛門^江達之、

一 御馬廻工藤吉右衛門申立候^者

一 地船大小 四拾四艘 丸木船天當船共^二
破船仕候

一 九人乗 舟頭 藤右衛門

中物諸材木積入

右船水主之内源太郎と申者老人流死、

尤死骸上り申候、

一 八人乗 舟頭相渡 源七郎

右船名^(水主之)主之内弥平次・甚九郎と申式人

流死、尤上り申候、

一 六人乗 右同 伊兵衛

右水主之内仁兵衛・六平式人流死、尤仁兵衛

死骸上り申候、

一 五人乗 右同 権左右衛門

右水主之内市郎平壱人流死、

一 式人乗 舟頭松前 三太郎

右舟頭水主共別条無之、

一 式人乗 右同 喜太右衛門

右別条無之、

一 式人乗 舟頭油川 久右衛門

右同断

右之通去ル十九日朝六時頃より同五時迄

之津浪^三小泊間懸リ之舟破損如斯

御座候旨申遣之、作右衛門^江達之、

(略)

八月一癸巳日 快晴

(略)

一 勘定奉行申出候^者當七月十九日

明七時、津浪^三潰家并破船・死人・

田畑損毛左之通、

鱈ヶ沢

一 拾六艘破船内 三艘松前船
拾二艘地船

一 四軒 痛家

一 男子老人流死

一 堀切橋 折れ痛

一 濱御蔵後西側浪除所々流失

一 拾四間余浪除流失

小泊

一 四拾三軒 潰家

- 一 男拾人流死内 四人小泊村之者
六人旅水主
 - 一 五拾壹艘破船内 四拾四艘地船
七艘旅船
 - 一 田方五反五畝貳拾七步損毛
 - 一 畑方九畝步 右同
 - 一 塩釜拾貳筒 流失
 - 一 牛貳疋 流斃
 - 一 赤石組之内
 - 一 赤石村
 - 一 田方壹町歩程 損毛
 - 一 柳田村
 - 一 田方三反九畝歩 損毛
 - 一 関村
 - 一 田方貳町歩程 損毛
 - 一 畑方五反歩程 右同
 - 一 八軒 潰家
 - 一 貳拾軒 痛家
 - 一 漁船丸木船八艘 流失并割痛
用立不申分
 - 一 駒壹疋 流死
 - 一 鳴村
 - 一 四軒 潰家
 - 一 拾壹軒 痛家
 - 一 漁船貳艘 流失并割痛用立不申分
-
- 一 金井沢村
 - 一 田方貳町歩程 損毛
 - 一 畑方壹町歩程 右同
 - 一 貳拾五軒 潰家
 - 一 拾五軒 痛家
 - 一 男女四人 流死内
男三人
女壹人
 - 一 駒壹疋 流斃
 - 一 漁船三拾四艘 流失并痛用立不申分
 - 一 鴨村
 - 一 貳拾壹軒 潰家
 - 一 貳軒 痛家
 - 一 男女三人流死内 男貳人
女壹人
 - 一 駒壹疋 流斃
 - 一 漁舟丸木船貳拾艘 流失
 - 一 田野沢村
 - 一 田方貳反歩程 損毛
 - 一 五軒 潰家
 - 一 塩釜壹筒 流失
 - 一 丸木船壹艘流失并痛用立不申分
 - 一 男女三人流死内 男壹人
女貳人

晴山村 (はれやま)

一 塩釜老筒 流失

轟木村 (とろみぎ)

一 田方四反歩程 損毛

一 式軒 痛家

一 塩釜老筒 流失

一 丸木船八艘 流失

追良瀬村

一 田方式町歩程 損毛

一 塩釜式筒 流失

一 丸木船六艘 流失

廣戸村

一 田方六反歩程 損毛

一 三軒 潰家

一 式軒 痛家

一 塩釜式筒 流失

一 丸木船式艘 右同

横磯村

一 老軒 潰家

一 女三人 流死

一 駒老疋 流斃

一 丸木船式艘 破舟

風合瀬村 (かみせ)

一 丸木船五艘 破船

三馬屋村領中濱

一 式軒 潰家

深浦村

一 六艘 痛船

大間越湊支配森山村湊

一 老艘但旅船 破船

一 男老人但右船頭 流死

金井沢湊

一 御番所老間 浪押込潰

一 五艘破船 内 四艘旅舟
老艘地船

一 男八人流失内 老地之者
七人旅水主

右之寄

一 百六拾七艘 破船

一 六艘 痛船

一 百拾式軒 潰家

一 五拾六軒 痛家

一 三拾三人内 男廿六人
女七人 流死

一 田方九町老反四畝廿七歩 損毛

一 畑方老町五反九畝歩 損毛

一 塩釜拾九筒 流失

一 牛式疋 流斃

一 駒四疋 右同

一 所々波除三ヶ所

一 御番所壺ヶ所

右之通申出之、作右衛門江達之、

(略)

八月七己亥日 曇 昨夜中より雨 終日及夜

(略)

一 小泊村湊目付申出候者

一 丸木船 三拾艘

式人乗

一 小廻船 六艘

同

一 天當船 八艘

一 田方五反五畝式拾七歩

一 山畑九畝歩

一 塩釜 拾式筒

一 潰家数 四拾三軒

高無 万太郎

一流死 四人 同 新三郎

同 金兵衛

同 彦十郎

右之者共死骸相尋見出申候、

一 女牛式疋 高無 吉兵衛

右者津浪^三而引流斃申候、

外^二

一 旅船七艘右間懸^リ之船不殘破船仕候

右水主之内六人流死仕候

右之通詮儀仕候所、如此御座候旨申

出之、作右衛門江達之、流死尋出候

死骸、同所勤番見届之上、別条

無之候ハ、片付候様大目付江申遣之、

一 赤石組代官申立候者轟木村塩

木拾歩一、先達^而津浪流失之處、

段々浪^三而打上^リ候分取集候分

式百廿九本相改、相違無之旨申

出之、作右衛門江達之、

(略)

八月十壬寅日 晴

(略)

一 鯨ヶ沢湊目付申立候、湊方傳馬船

此度津浪^三而痛損候付、新規出来之

儀申出之、詮儀之上、積書にて申出之、

積書之通申付之、

一 赤石組代官申立候、同組村々塩釜

家業之者、先月十九日大浪二而塩釜

流失二付、釜道具杣取願申立之、

僉儀之上作右衛門江達之、申立之通

御停止木伐取不申様申付之、山方江も

申遣之、

(略)

十一月十二癸酉日 陰晴
卯之中刻
地震

(略)

十一月十四乙亥日 陰晴
未之中刻地震
申之八刻冬至二入

(略)

十一月二十二癸未日 晴
酉之刻方雪
夜二入辰之刻地震

(略)

十二月十辛丑日 陰晴
巳ノ刻地震時々
風吹及夜中

(略)

十二月二十三甲寅日 晴

(略)

一 一筆令啓上候、冷氣御座候得共、

志摩守様愈御勇健可被成御座、乍憚

目出度御儀奉存候、次各様御堅固御

勤可被成珍重存候、然者今度其御

地津浪二付、海邊之在家及難儀、尤

船共数多損失、通用茂差滞候由

相聞候、各様御苦勞察入存候、右之段

出羽守承之候二付、何品三而も御用立

可申旨、此度江府より申来候、依之少

分如何敷存候得共、俵子并酒別紙

之通差越申候、下々御救之御用二も

罷成候様二と存候、右為可申進之、如斯

御座候、恐惶謹言、

月日

松前内記様
(松前藩 家老)

下國齋宮様

蠣崎内蔵丞様

(津輕藩 家老)
棟方作右衛門

(津輕藩 家老)
隈部 伊織

覚

去月十九日明ヶ七時頃、松前大浪三而

村々潰死人注進書之写

- 一 三拾人 同所^三而舟六拾艘程潰 舟 城下
- 一 三拾人程 手者五六拾人死申候 松前
- 一 拾八九人程 (雨垂石) あまたれ石
- 一 六拾人程 茂草
- 一 百三拾人程 (清部) きよ部
- 一 三百七拾人程 外^二旅人八拾人程 ぶら町 (江良)
- 一 拾人程 をこしへ
- 一 貳拾七人程 原口
- 一 八人程 (小砂子) ちいさこ
- 一 七拾人程 (石崎) 石崎
- 一 貳拾人程 (沙吹) 塩吹
- 一 六人程 (木ノ子) さのこ
- 一 貳拾人程 (原歌) 原宇田
- 一 七人程 船手百八拾人程 右所^三而船八拾艘潰申候 江差
- 一 六拾人程 (泊) とまり
- 一 三拾人程 田澤
- 一 拾七人程 (伏木戸) ふしきと
- 一 百三拾人程 (乙部) をとへ
- 一 八人程 小茂内
- 一 拾五人程 (突符) とつふ
- 一 四拾人程 (三ツ谷) 三ツ屋
- 一 貳百拾七人程 加柱

- 一 一百五拾人程 (相沼) あひ野間
- 一 三百人程 熊石

死人貳千人餘御座候由、

右^者松前村々より注進、前書之通

書写参候^三付、差上ケ申候、以上、

八月 志摩守様御宿三馬屋村 松前屋長兵衛

一戸徳右衛門様

福士 弥内 様

(略)

寛保二年

四月十五甲辰日 快晴 月蝕子之刻甚

(略)

六月二十五壬子日 快晴 夕ノ刻地震

(略)

(寛延四年^二宝曆元年)

正月二十八日庚寅日 陰晴 西ノ刻地震

(1759年)
(宝曆九年)

七月二十七乙巳日 快晴
申之刻過四方一圓霧ノ如く曇、西ノ刻ヨリ夜中灰ふる

(略)

七月二十八丙午日 晴
昨晚七ツ時頃方西北之方至而強ク曇大雨之様ニ候之處、雨者一向降り不申、七ツ半頃方

■(土へんに分) 土之様成物夜中降、今朝

厚サ式三歩位降積、屋ね其外草木之葉江留り有之、右降候

土之色ハ灰之様ニ見へ至而細力成り、尤夜中降候と相見へ、

馬之髪之如く成毛、長サ老尺五寸位方五六寸位迄、色ハ栗毛之

様成有之、又ハ白キも有之、則日記江結付置之、

一 右■(土へんに分) 土之様成物、今朝五時頃少之内晴候處、亦々降、弘前八八時

過迄少宛降、在々所ニ寄晚迄降候所有之、所ニ寄降様厚薄有ル、

天氣之様子、日者照候得共、右曇ニ覆ひ、隴月などの様にて、

終日暮る、八半時頃より南東之方至而強曇申候、

一 當月十七日之頃方一向雨降り不申、照續及濁水候、此三日朝夕

之日至而赤ク、取訊今朝日者赤ク見へル、尤入日至而赤シ、

(略)

七月二十九丁未日 快晴

(略)

一 高杵組大庄や申立候、一昨廿七日七時

頃より灰土■(土へんに分)之如く成物降、夜中

相止不申、廿八日七ツ時頃迄降申候、右降方

村々過分厚薄相見得不申候、高杵村

邊より立石村邊ハ少々厚クふり申候、

其外高杵組目屋野沢邊まで大部

同様御座候、弘前邊方和徳堀越組ハ

高杵村方少々薄キ方相見へ申候、

一 作毛ニ差障之儀、今ニ一向相知不申候、

外作者障一向無之様奉存候、

稻花最中之分者別差障可申候哉、

五六日三者睨と相知申間敷様奉存候

相考、追而可申上旨申出之、五郎左衛門江達之、

一 廣須組大庄屋申立候、一昨廿七日七時方

北之方悉曇、嘸雨に可有御座と奉存候處、

粉土之様成物降申候而歩行之者目口ニ

入候而迷惑仕候、七時頃より今朝四時迄

之内、所ニ寄式三歩計降り敷申候、

別而作毛江差障候様子相見へ

不申評判ニ御座稀成事之様ニ

皆々申候、則降候物袋入ニ仕、奉入御覽候、

此段御注進申上旨申出之、五郎左衛門江

相達之、

一 金木組大庄屋申立候、同組同新田之

村々、一昨廿七日昼八半時よりあぐ

降り、尤所ニ寄五歩位より七八歩位迄

ふり申候所も御座候、依之田畑作物

模様至而悪敷相見得申候得共、未睨と

晴上り不申候故、善悪之義相知不申候、

追々相知次第可申上旨申出之、達

五郎左衛門^{江之}之、

(略)

七月三十戊申日 快晴

(略)

一 青森在番諸手足輕頭岡文左衛門方

以書狀申来候^者去ル廿七日昼八時

過より同廿八日終日、於當所西北

曇霧雨之様焼砂降申候、此段

申上旨申出之、五郎左衛門^{江之}達之、

(略)

八月十七甲午日 快晴

當日の入日至^而
赤し

(略)

八月十八日乙未日 霞

昨夜の月殊之外赤し、今朝日至^而赤シ、
段々霞強し、午ノ刻過より別^而赤し、
日蝕などの天氣の様也、霞強く、なかに
随^而猿毛焼様なる匂ひ一圓有之、
申ノ刻過雷時々発ス、酉ノ刻過より
雨ニ成ル

(明和三年 正月二十八日地震・以降余震記録)

(略)

二月八戊申日 快晴

昨夜度々地震、午ノ刻
地震強、未ノ刻地震同強、
其外少地震度々

(略)

二月十庚戌日 曇

昨夜中西ノ刻方地震
五六度及其後丑ノ
刻方今朝迄式三度
地震今朝雪一寸程
積時々小雪今日未ノ刻過
小地震

(略)

二月十二壬子日 快晴

昨夜少々地震
酉ノ中刻方雨降戌刻晴
巳ノ中刻地震酉ノ刻過
同式度

(略)

二月二十八戊辰日 曇

昨夜酉ノ刻過方風立
則刻戌ノ刻過き大風
夜中兩三度鳴動昨
昼申ノ刻過地震少、

(略)

明和六年

正月一乙酉日 晴

今朝辰ノ刻過雪少々降、
則刻止ム、同刻灰のこつく成物
少々降、則刻止

(略)

六月九庚申日 陰晴

朝ノ内霞、辰ノ刻方
陰晴、則刻地震余
程強同刻過少々宛二度
地震、

(略)

六月十五丙寅日 快晴

昨夜戌上刻地震少

（十一月改元 安永）
明和九年

九月十五丁未日 快晴

月の色少々赤し、中央青雲
四方灰の色の雲立、四方山々不相
見得、申の刻過より岩木山少々見
得る、及終日今夜月蝕皆既、
子の五刻東の方より欠初め、
丑の六刻甚し、寅六刻西の方ニ終る

（略）

九月十九辛亥日 陰晴

（略）

一 今日猿賀神宮寺 御参詣天氣

不勝^ニ付、御延引被 仰出候、

（略）

安永四年

二月七乙酉日 曇

今辰ノ刻より雪灰交
降、雪ノ色黄^ニ見ゆる

（略）

天明六年

二月五己卯日 曇

今朝少之内灰降、午刻
より雨、申刻過方みそれ

（略）

寛政二年

九月二己卯日 晴

今晝丑ノ刻頃雨則刻止、今日午刻頃方
灰降、申ノ刻前止、申ノ刻雨則刻止、午
刻頃方曇

史料14 『津軽古事傳記』 (青森県立郷土館 所蔵)

(卷十全)

○寛保元^{辛酉}年 元文六年^ニメ三月三日改元

(略)

(七月)

一 同十九日 或二十八日 西ノ濱上磯津浪 或二十三、鯨ニ而 金井ヶ沢村田方式町程

水押ニ成る、其上塩きり當り候畑方一町歩程右同断、綱三百七拾抱

鱈鮫綱諸品不残、丸木舟三拾四艘同断、家四拾軒内廿軒痛損、

拾五軒潰家、馬老疋斃、死人八四人、右之内岩崎村も入申候 ○鴨村

家廿三軒内四軒痛損、拾九軒潰家、綱式百廿拾流失、丸木舟廿

艘同断、死人三人、斃馬老疋 ○田野沢村家五軒痛損、塩釜

老ヶ所、田畑少々痛 ○関村田方式町歩程、但石崎押上、其外水

押ニ成る潰家八軒、痛家廿軒、小童子橋老ヶ所、但両杵土留

柱共ニ痛、御制札老ヶ所、但板さや・矢来共ニ痛、怪我八人^{ニ而}

老疋流失、綱三百五拾抱色々、丸木漁舟八艘、但四尋方五尋迄

式尺五六寸方四尺迄不残痛損 ○嶋村潰家四軒内老ヶ所物

置、綱百六七拾抱痛、舟式艘五尋方式尺方三尺迄、大浪ハ丑ノ刻

頃、同所湊目付者其頃御馬廻方相勤長谷川理右衛門罷有、夜中事

寝罷有所、急ニ大水押入、帯を致間もなく家来共ニ裸ニメ、漸々

御番所之屋^(屋根)江上り、夜中大浪ニメ御番所拔上り、波ニゆられ最

早是迄と覚悟を究メ居所、所之者共山方是を見付、腰^江縄幾

尋となく附ケ、ウニキ行、兎角メ其処^(泳ぎ)江行、御番所之拔屋ねへ付、山

手方引、助上ケ申候、翌廿日勘定奉行三上仁右衛門見分被仰付罷越候所ニ
理右衛門雪拂之柄を大小之代りニ指^(巻)、湊目付是ニ罷有と断候由、其届之^(巻)
物語ニ候、此夜大浪之前西濱四五百間干潟ニ成り、間もなく

大浪出、金ヶ沢湊込引さらひ候由、或ニ七月十九日朝方十三、鯨ヶ

沢、金井ヶ沢込津浪有、小泊金井ヶ沢破損、死人拾三四人宛有、

大波三度ニ及ぶ、

死人拾七人、金井ヶ沢湊舟三艘、死人八人、小泊村死人六人、家四拾

三軒、奈良記ニ西濱ニメ津浪之事鯨ヶ沢・小泊・赤石村・柳田

村・関村・嶋村・金井ヶ沢村・同湊方共ニ鴨村・田野沢村・晴山山・追ら

瀬・廣戸・横磯・風合瀬村・三馬屋村領中濱・深浦村・大間越

湊支配森山村、右之処ニメ破損百六拾七艘、痛舟六艘、潰家

百拾式軒、痛家五拾六軒、流死三十三人内 男廿六人 女七人 田方

損毛九丁一反四畝廿七歩、畑方老町五反九畝歩、塩釜流失

十九筒、流斃牛式疋、同駒四疋、所々浪際三ヶ所、右之通御座候、

長崎記、同七月十九日之朝、忝前津浪 (松前) 江指 (巻) 諸國方廻舟百

三拾艘程懸り候内五六艘無事之由、濱蔵不残流失、

本松前舟五六拾艘程破舟、人式拾人死候由、しいら町家

流、五六拾人死候由、ねふた家式三拾軒、人三拾人程死候由 ○き

よ部家四五拾軒、人六七人死候由 ○石崎村中ニメ人式人助り申由、

もくさ家式三拾軒、人廿人程死候由 ○泊り・田沢家百軒程之

所残り無由 ○乙部家式百軒程有之所、御番所と六兵衛と申者

之家計残候由、尤江差方上熊石込人四千人余死候由、或ニ忝前

四拾四^(里)之内人家流亡スと男女六七拾流、

右同刻御國ニメ、金井ケ沢家四拾軒程流、但御番所共人四人死ス、

関村家拾四軒、鯨ヶ沢ニメ子共老人死候由、諸材木多冲^江

出候由、小泊ニメ家四拾八軒程流、人四人死、地舟四十四艘・旅舟七艘

手主六人死、塩釜拾三筒、外ニ諸材木夥敷流れ候^{而冲江}

出申候、右之外上磯・岩崎迄津浪ニ沙汰メ破損無之候、

或ニ松前去ル十二日十三日方松前大嶋焼候、八月五日西風流^(硫黄)

くさし、十二月廿三日津軽中ニ灰降、

(略)

五月寛保元改元

○元文六辛酉年

(略)

一 七月十九日曉方廿日朝迄、松前津浪ニメ人凡四五千人死候由、此外ニも

姓名不知死人数不知候、御國ニメも其夜小泊西濱邊水出候得共、

大成事^{ニ者}無之候、南部領も其夜所々大水之由、

一 十二月廿二三日之夜、灰交リ之雪降申候、

○寛保二壬戌年

△ 正月廿日灰降候、在ハ余程、大間越ハ手ニ取程、右ハ松前大

山焼申候由、鉄砂之如^ニ候、或ニ正月四日小泊・三馬屋・今別・中里迄

灰三四寸降、四月十四日^{ヒル}昼四時方八時迄灰降、外濱ニメ昼闇也、

一 同廿六日良ノ方ニ大星出候、光リ五尋程、或ニ彗星出、彗ノ頭丑寅^ニ

當リ長サ四尺程、星ノ頭ハ平生之星ノ如^ニ候得共光無、夜八ツ頃方

真東共 見得候 出二月十日頃迄相見得申候、 如斯也、但江戸

ニメハ上元星と唱候由、

△ 二月十日朝日ニツ出申候由取沙汰

(卷十一之一)

○寶曆元^辛未年 十一月三日改元、御國ニ^而同廿七日御触

(略)

一 同正月廿二日之夜丑ノ刻、翌廿三日酉ノ刻少々宛地震、

一 同二十九日亥ノ刻方酉ノ刻迄少々煤はみたる如き雪降四五寸程 又二月

九日之朝、月三ツ出候様^ニ外瀬村之者慥^ニ見たると云、其外雪と風説ス、

(○寶曆九^己卯年)

△ 七月二十七日暮前方灰降、厚サ老歩餘、廿八日終日降、大間越邊^者

三四寸も降候由申候、此時天曇り、日月共ニ大^ニ赤シ、

一 同閏七月十五日、昼夜共ニ日月共ニ余光無之赤ク見へ、同十七日山々鳴動

致、同十八日方大雨雷、亦申ノ刻少々地震、

史料15. 『津軽編覽日記』 弘前市立図書館 所蔵

(第六冊)

一 元文庚申五年 七月^二閏有之

○ 七月上旬^(マ、マ)松前大津浪にて松前中死人四千何百人

と申事^三前代未聞之事之由、其外牛馬、

家蔵過半流失、舟百余艘破船有之、同月八日より

松前大嶋焼出、十五日にあく降、同廿三日相止

一 寛保二壬戌年

(略)

一 正月四日夜灰降、所により三四寸ふる、下在ハ余程、

大間越ハ手に取程、右は松前大山焼申候由、黒鉄砂之

ことく候

(略)

一 四月十四日灰ふる

(略)

(第七冊)

一 宝曆元辛未年 六月閏 寛延四年目十月廿八日宝曆卜改元

(略)

一 正月廿二之夜丑ノ刻頃地震少々、翌廿三日酉ノ刻

右同断

一 同廿九日亥ノ刻方子ノ刻頃込少々、ばみたる

様成雪ふる、右雪四五寸程ふる

(略)

(第八冊)

一 宝曆九己卯年 七月^二閏有之

(略)

一 七月廿七日暮前方夜中懸砂降、大間越邊ハ三四寸程

ふる

(略)

一 寛保元辛酉年

元文六年三月
三日寛保と改元

一 同十八日^(七月)松前津浪^三、御國海邊も小泊方西ノ濱通り

所々津浪、同日之朝明七ツ時小泊^三人家四拾三軒、人三人

丸木船三拾艘、天童八艘、材木積大船七艘、水主

六人、馬四疋、村、嶋村、鴨村、金ヶ沢四ヶ村^三家六拾七軒

男女十三人、馬四疋、大小之船八拾七艘、材木船六艘

水主八人^(マ)宛す、網千百十把流失、則夜海鳴島四五

百間皆干潟になり候^而間もなく大波出、金ヶ沢湊

目付御馬廻り長谷川理助、番所之萱屋之屋根へ

乗流れ漸々助る、鱒ヶ沢濱町へ浪寄六才之男子

死す、松前^三同時四拾四里之内人家流亡、男女

六拾人死亡、是松前^三二年之間兩度之津浪也、

一 八月十七日宵月ノ色赤ク翌十八日昼頃方日の色甚タ赤し、大雨雷なる、申ノ刻地震少々致候

(略)

一 明和三丙戌年

(一) 正月二十八日 大地震

(二) 二月八日 地震

一 同十日申ノ刻過大霧降、今夜子ノ刻風吹少々ツ、度々鳴動いたし、西ノ方黒雲おゝひ平日之空色に是なし、

一 同十二日静に兩三度鳴動致候、惣二頃日度々地震、

(正月)廿八日已後不止候ニ付神明、八幡、和徳稻荷宮江町々

より御神樂を奏し候事度々ニ御座候、又頃日地震に付落書数多出候、内少々爰に記す、

(略)

(第八冊)

一 明和六己丑年

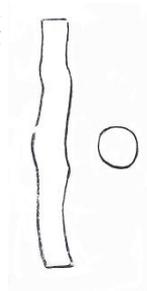
一 正月元日辰ノ刻方午ノ刻迄灰少々降

(略)

(六月)

一 同十四日戌ノ刻西ノ方方東之方江旗雲出る尤月の前通りへ幅三尺程長サ十四五間位ニ白き布をはへ候様

に出、諸人多ク見る、図圖のことし



如斯白雲出

(略)

(第九冊)

一 安永四乙未年

十二月二閏有之

(略)

一 同七日七時過灰ましりの雪降(二月)

(略)

一 安永九庚子年

一 正月二日昼九ツ過西ノ方二雷の如之音摺鉢を摺

如ク或ハ雪の上を箱雪舟を引音の如ク暫の間鳴申候由、百沢寺二聞申候得は御山の上二鳴候様聞得申候由、高岡杯二聞候者も在、不聞者も有之由

(略)

(第十一冊)

一 天明六丙午年

閏十月二有

(正月)

一 同廿一日計天氣吉今日巳の刻灰降る

一 同廿三日 (略)

此日午の刻頃濡雪シメふり候処、右雪へあくまじりにてふり候故、雪薄黒く成申候、夫方晴候て、

暮頃方亦々終夜五寸程位ふり申候、(略)

- 一 同廿九日今晝寅の刻前并今日巳の中刻兩度
地震致候

(二月)

- 一 同六日昼四ツ頃雨降、其雨の中へ灰ましり降申候、
是ハ正月廿二日より灰多く降、頃日まで折々降
雪くるミ申候、右は皆岩木山より吹おろし候風
にて、ゆわう(硫黄)の焼候灰飛ちりふり候にて可有之と
人々申候、

(第十三冊)

- 一 寛政二庚戌年

(九月)

- 一 同月二日朝五ツ半過頃方灰降、四ツ過方西北の方曇り、
薄赤ク遠方火事の様子に見得候処、段々灰降り七ツ
時迄降、夫方少之間小雨ふり、夫方灰降事相止、
往来の人之目に入難儀、其上衣類も白ク成候、草
の葉江付候灰は雨ふり候得ハ、土をこね候而葉へ
付候様見へ申候、灰は甚細かにて物にうけ見候へハ、所ニ
より二三歩之厚サにたまり申候由、近年雪中に
はいふり夫(それ)已前(以前)にも七月灰降り申候、近年灰ふる事
是にて三度ニ御座候

史料16. 『葛西秘録』 弘前市立図書館 所蔵

(明和)
同二丙
戊年

(寛保元 辛酉年)

一 七月十八日、松前津浪にて御國海邊も小泊方西濱通り所々津浪、七日(マ)

(略)

之朝七ツ時小泊にて家四拾三軒、丸木船三拾艘、水主六人流亡、関村・

(寛政)
同二庚
戌年

鴨村・金井ヶ沢、家六拾七軒、男女拾三人、馬四疋、大小之船八拾七艘流

(略)

失、即夜海鳴四五百間干潟ニ成候而間もなく大浪出、金井ヶ沢湊

一 九月二日 灰降申候、

目付御馬廻長谷川理介、番所の萱家の屋根へ上り漸助り申候、

(略)

松前にて四拾四里之内人家流亡、男女六七拾人流死之由、

(略)

(寛保)
同二壬
戌年

一 正月四日灰降申候、所ニ寄深サ三四寸も降候、其後三四度如此、

(略)

宝曆元 辛未年

一 正月廿九日煤色雪降、

(略)

(宝暦)
同九 己卯年

(略)

一 七月廿七日晴天ニ御坐候処、日暮前方北天曇、暮方灰降草木之葉

黒ク成程降、所ニ寄老寸余も積り、出穂最中故稻ニも障り申候、

春立方言、時(はやり)行候(灰)あぐ之下々と申語御停止ニ成、

(略)

史料17. 『封内事実秘苑』 弘前市立図書所蔵

(十一卷)

寛保元辛酉年 五月十六日改元御触有

(略)

七月十九日西濱辺津浪^三、海岸村々・人・家・田地共

流失、死亡夥敷候由、此時金井ヶ澤湊目付御馬廻

長谷川理左衛門在勤^二、則^レる^ハ、海辺四五百軒^四ツ、干潟

^ニ成候所、則夜急^二大浪押入、甚た事急^二而帶^レ

候間も無之躰にて、家来共^二丸裸にて出、御番所

之屋根へ上り候処、引浪にて御番所も危候処、山手

方両三人游き付、綱を用ひ漸救ひ一命助り候由、

翌廿日勘定奉行三上仁左衛門見分^二罷下候処、

理左衛門義雪拂之柄袋引はたの如きを大小の

代り^ニ帶、湊目付是に罷在候^レ追出候体、色々咄

^ニ成候也、西濱^ハ、鱒ヶ澤より大間越迄、北^ハ小泊・三

馬屋迄之損亡筆記に難尽、

(略)

寛保二壬戌年

正月朔

一 同四日夜より廿日頃迄灰降、厚三四寸、

一 同廿六日良の方^ニ彗星出、
江戸にてハ上元星と唱候由、
二月十日頃迄現ル

(略)

(十三卷)

宝曆九己卯年

(略)

七月廿七日灰降一寸餘、同廿八日終日降、大間越辺三四寸

計ト云、此日天氣甚た曇り、日月共赤氣有、尤出

穂最中故大にさわる、

(略)

一 同十五日雲立怪敷、昼夜日月色赤く餘光有、
(閏七月)

一 同十七日山々鳴動、月二ツ出、

一 同十八日同断、日月共^二見ゆ人眼^{マシロカ}睡す、此日大雨

雷、申ノ刻少々地震、

(十四卷)

明和三丙戌年

一 同二十八日酉之刻大地震、
(正月)

今日天氣和き、元来雪厚く、時分柄餘意^ニ候得共、所々森林^ニ者霞

厚くかかり、一入春めきたる事と存候、然所六時とたん^ニ乾の方

より鳴動其響百千之如大地動揺して暫不止、

(以下略余震記録多数あり)

(略)

一 同八日大地震、但廿八日已来、昼夜止事なく拾度式拾度計ツ、震候
(明和三年二月)

得共、今日^者別^而強く、立木も地^江附如く、其響雷鳴^ニひとし、誠

廿八已来也、此日先頃之破損残り、或ハ漸危を遁ル、在町家々
再破損大壞^ニ及ぶ、

(略)

一 同十日申刻大雪降、夜九ツ時頃方風吹出、度々鳴動、雲氣常^ニ

変ル、

(略)

明和六年己丑年

正月朔

一 今日辰之刻方午之刻^ニ至、灰降雪黒成、

(略)

六月九日朝地震甚強 ○十四日夜四時、西方東^江旗雲出、尤

月之前^江幅三尺計長さ拾四間位白布を張候如^(マ)候出、

(略)

(十五卷)

一 同月二十八日暮前^(明和七年七月)方西北の方一円^ニ火之手の如く赤雲立り、四ツ時ころ

東方同断、星も赤く見得南北^江餘光十三筋有、暁方消へ、此日江

戸筋并道中筋も同断と云、

(略)

(安永元^壬辰年)

(略)

一 同十五日^(九月)月食皆既、

一 同十九日暁八ツ時方煤或ハ腐土抔焼候如く、焦氣強^(臭カ)く、夜明^ニ至満
天悉く曇り、色赤黄^ニして西風少吹、昼四ツ頃迄甚敷匂ふ、是
大嶋の焼也と云、右^ニ付今日猿賀^江 御出御延引^ニ成、

史料18・1. 『永禄日記』 山崎立朴編(1956) 青森県文化財保護協会編

史料18・2. 『梅田日記 下』 弘前市立図書館 所蔵

ちのく双書第1集 青森県文化財保護協会

上下共二

(元文辛酉年 五月寛保元改元)

不残編入スム 明治九年 九月二日 下沢

(略)

自享保十二年

七月十九日晚より廿日朝迄、松前津浪^三而人凡四五千人死候由、此外^二も姓名不知

至安永七戌年

死人、数不知候。御国^三ても其夜小泊、西浜辺水出候得共、大成事^二ハ無之候。

南部領も其夜所々大水之由。

(略)

(元文六辛酉年)

十二月廿二日三日夜、灰交りの雪ふり申し候。

一 七月十九日晚方^マ廿日 朝迄、松前津浪^三而人凡四五千人死候由、

(略)

此外^二も姓名不知死人数不知、御国^三ても其夜小泊・西濱邊水出

寛保二壬戌年 正月四日夜灰降候^而所^二寄て深三四寸も有、其後三四度如此。

候ても、大成事^二ハ無之候、南部領も其夜所々大水の由、

(略)

一 十二月廿三日の夜、灰交りの雪降り申候、

宝曆九己卯年

(略)

(略)

寛保二壬戌年正月四日夜灰降候^而処^二寄深サ三四寸もあり、其後

七月廿七日晴天^二御座候処、日暮前より天曇り暮より灰ふる。草木の葉黒く成

三四度如此、

程降、所^二寄一寸余もつもあり、出穂最中故稲にさはり申候。春よりはやり候あく

(略)

の下々と申詞御停止^二成。

(宝曆九己卯年)

(略)

一 六月無事水不足、七月廿七日晴天御座候処、日暮前曇り、

八月十七日奇怪乃雲立、其夜月之色甚赤ク成、同十八日日之色甚赤ク成、光り少

暮方灰降り、草木の葉黒く成る程降、處^二寄一寸余も降

ク平日と違、何ッ迄^レ拜ミ候^而も不目^ク眩、假合バ皆既之蝕之様^二成候。若是日

積り、出穂最中故稲^二あたり申候、春方はやり候あく下々と申候

蝕かと人々曆を開き見候得共、十七八之頃日蝕之可有様なしと人々不思議^二覚候。

詞御停止^二なり、

昨十七日ノ月ニッ出、今日八ッ時過月三ッ出候、諸人咄申候。

(略)

一 八月十七日奇怪の雲立、其夜月の色甚た赤く、同十八日月

の色も赤く、光り薄く、平日と違ひ何つ辻^い拝^いも目くろ

めかす候、假合^いハ皆既の蝕の様ニ成候、若是ハ日蝕かと人々曆
を見候得共、十七八日の比蝕の可有様なしと人々不思議ニ覺候、

昨十七日の月ニツ出、今日八ツ時過、月三ツ出候、諸人咄申候、

史料19. 『津軽年代記』(『平山日記』) 東京大学史料編纂所復写本

(寛保 酉元年)

○七月十九日の晩は廿日朝迄、松前之大嶋と申

大山焼崩れ、津浪にて人多死候由、御當国^三而

も、小泊并十三鱒ヶ沢并西浜、浪湛候^而、水死破損

多、依^而所々へ御見分御役人衆下り申候、然共左

程之義も無之由^二御座候

○十二月廿二日、炭交り候雪ふり申候、是ハ松前

焼山故之由

(略)

○同^(寛保) 二 壬戌年

正月四日、灰降、所^二寄、深サ三四寸も降申候、四日

之夜分也

(略)

○宝暦元^辛 未年 十一月改元有

正月廿九日煤色雪降 ○越前越後二月赤キ雪

降候由

(略)

(宝暦九^己 卯年)

○七月廿七日晴天^二御座候処七ツ頃方地天曇

り暮頃方灰降草木之葉黒く成程也、所に寄て

壱寸余も積り、翌月閏有之ゆへ此月出穂最中

^三而余程稲にさわり申候、依^而春立方はやり候あぐの下々と申言葉御停止被仰付候

(略)

○八月十七日奇怪之雲立、其夜月之色甚赤く成、

同十八日日の色も甚赤く成、光り少く平日と

違、何迄拝^ミ候^而も目不眩、譬は皆既之日蝕成

様^二成候、若是日蝕か^と人々曆を開キ見候得共、

十七八之頃日蝕之有へきようなし人々ふ

思義に覚候

(略)

(明和三年一月二十八日 大地震・その後の余震)

(略)

(寛政二^庚 戌年)

○九月二日灰降申候

史料20. 『津軽歴代記類 二』国文学研究史料館 所蔵

寛保元年七月十九日、津軽郡西濱通津浪^二而 海岸村

々人家・田畑共流失夥敷、即日海辺四五百間ソ、干潟

に相成候、 工藤家記

津軽郡西濱通、金井ヶ澤・鴨村・田野沢村・関村・島村

田畑損毛多く、八十二戸漂流、死亡八人、馬三疋、怪

我人数不知、漁網千三百余張、船大小五十三艘海

失、小泊村にも死亡六人

此日松前ハ大津浪^二而 自他の船々
不残大破、死亡四千人余といふ

佐藤家記

寛保二年正月四日夜より二十日迄灰降り、厚三四寸、

黒^(懸)き 鉄砂の如し

後に聞く松前の
白ヶ嶽焼けたりと

工藤家記

史料21. 『佐藤家記 四』 弘前市立図書館 所蔵

(安永四年二月)

一 同七日夕、灰交り之雪降、

(天明六年正月)

一 同廿一日 灰降、

(略)

(天明六年二月)

一 同六日 灰降、

(寛政二年九月)

一 同二日朝、灰降^(急)三三歩積申候、日影赤く見

得申候、

史料22. 『梅田村彦六家記』 奥瀬清簡編(1980) 『本藩旧記 上』 歴史図書社、

(元文六辛酉年五月寛保と改元)

一、七月十九日の晩より廿日朝迄松前之大嶋と申大山焼崩津浪にて人多死候よし御当国小泊十

三より鱒ヶ沢辺迄浪を湛候故見分の為役人罷下候得共此方様御領分には何義なし

一、十二月廿二日灰交りて雪降

(略)

寛保二壬戌年正月四日の夜灰降所に寄深サ三四寸に至る

(略)

(宝曆九己卯年)

一、七月廿七日晴天の処七時より北天曇り暮頃より灰降る草木の葉黒く成程に降所に寄一

寸余積り翌月閏月有之故此節出穂最中にて余程稲草にさはり申候依^而春立より時行あ

くの下々と申言葉御停止になる

一、八月十七日奇怪の雲立其夜日の色甚赤くなる同十八日猶赤く光り少く平日と違何ッまで

見話候^而も眩する事なく日蝕の如くなれ共十七八日に蝕すべき様なしと人々不思議の思

をなす

史料23. 『津軽藩史』 工藤主善 著(1891) 近代デジタルライブラリーweb公

開

寛保元年七月十八日。東西兩濱有「海嘯」。人多死。

史料24. 『油川沿革誌』 青森 大瀬熊三郎 編(1892) 国会図書館近代デジタ

ルライブラリーweb公開.

寛保元年七月十八日市街海嘯ニカ、ル波濤山ノ如ク海水漸々瀬田糸川及油川ニ入り

來リ溢レテ市街ニ汎濫シ家屋ニ及ビケレバ人々大ニ恐レ家財ヲ負フテ山麓ニ逃ル、

モノ多ク小舟ノ市中ニ漂ヒ屋ニ觸レテ破壊スルモノアリ既ニシテ海漸々退イテ舊

ニ復ス

史料25. 『八戸藩目付所日記』 八戸市立図書館蔵

『元文六改メ^{三月三日改元}

寛保元年^{辛酉}日記』

七月八日 八半時地震

(略)

十一月十二日晴、今五時兩度地震、

(略)

十一月十四日晴、八時分地震、

(略)

十二月十日晴風、巳ノ刻地震、

『 自正月至十二月

寛保二年^{壬戌}日記 』

*正月四日、昨夜雪少シ降、

(略)

一 昨夜砂ふり申候付、御祈禱被

仰付、尤豊山寺常泉院伊勢守へも

被 仰付、右^二付御年寄中御役人中

御上り被成、

(略)

正月七日晴 朝五時前
少々地震

(略)

二月十五日西風、夜中砂降

(略)

安永元年

(略)

九月十九日 曇

(略)

一 未明方一天曇、尤^(曇り)ふすほり匂^三而霧之如く

曇り、西風少々九時頃方右相止ム、

(略)

一 今曉方天氣曇、臭氣有之^三付不怪^(伏)、

神明并法^(靈)江^(靈)御祈禱被 仰付、

注 *八戸藩に特有の暦により

十二月が小の月の場合(寛保元年)、翌年(寛保二年)正月朔日を十二月三十日、
正月二日を正月朔日とし以降正月二十一日までを一日ずつずらす。正月二十二日
を欠日とする。したがって、八戸藩寛保二年正月三日夜の降砂は、津軽藩の正月
四日夜の降灰と同日時にあたる。

史料26. 『鶏肋編』^(けいろくへん) 致道博物館 所蔵

第六十四冊 卷第五百五十九

鶏肋編

加藤正從撰

古手扣年記 三

(略)

○寛保元辛酉年

元文六酉三月
三日改元寛保

(略)

○當七月十九日ノ曉松前津浪うち申候、破船数多有之、

家流失数多、死人千人余有之、同日庄内・加茂辺迄

大浪打候事

史料27. 『記吏別集』^(きしべつしゅう) 順軒記事 卷之一』 磯部順軒著、今泉尾省三・真水

淳編 (1977) 越佐叢書 十二 収録

(寛保元年辛酉)

七月

一 十九日 天氣快晴 朝卯中ノ刻 瀬波・岩船大^ニ海鳴り大波起る 其音雷の如く数里の間に聞ゆ 同時羽州海浜・北国海中皆如斯と云 いきれぬたと云 同時津軽・松前海辺大波来 溺死多し

津軽・松前世に云津波^{三而} 海浜人家押流 溺死多シ 唯羽州・北国海辺斗

大海鳴 波の揚る事数丈斗^三して人家迄ハ不来

史料28. 『沢内年代記』 陸中国和賀郡 総集編 才時記外(草井沢本) 沢内史

談会編 (2000) 沢内村教育委員会, 82p.

(安永四年) 二月七日赤雪降る、

(天明六年(丙午)(1786))

(略) 二月六日晚赤き砂土^{まな}ふる、同朝地震ゆる、三月一日、二日雨降る、同晚^(午後四時) 七つ時に大地震ゆるあきなく六、七度つよぐゆる、同晚三四度ゆる、十一日 昼より、どんどんとなる、三月六日晚赤きすな土降、

史料29. 『佐渡国略記 十一』 新潟県立佐渡高等学校同窓会 所蔵 舟崎文庫

国文学研究資料館に寄託

(寛保元年)

一、酉七月十九日、晴天^二、海上悪敷浪忒忒枚打、海之面常之如ク

當国^二廻船痛、松前邊^二てハ大浪^三殊之外痛候由、百式十

三年以前有之候

史料31. 『佐渡年代記』 新潟県立図書館、国文学研究史料館所蔵、翻刻本国

会図書館 web公開

寛保元辛酉年 三月十四日改元

(略)

一 七月十九日相川の海邊高波^三町々^江打揚ケ取分ケ

柴町・鹿伏村の邊ハ町並或ハ家居を越し打あケ

引汐耆町余有と聞ゆ、外海府村々も同じく驚

崎浦目付所其外村中の家居過半引流し、佐州に

おゐてハ前代未聞の事たるよし、其後松前へ行し

商船歸帆して物語にハ、七月十八日十九日ハ松前大波

にして家数六千軒余打流■掛りの廻船五六百艘

破船國人船人凡三四千人流死溺死せしよし

史料30. 『撮要年代記』 国文学研究資料館 所蔵

寛保元

(元文六辛酉年七月)

同十九日朝六ツ時津浪打、海辺五十間

或ハ百間程干潟^二なる処有、又別状無之処もあり、

鷺崎村洪浪にて家損船流出る、水津にて他國

船三艘痛、松前にて七ヶ村皆損、人二万人余死云々、

如此津浪百廿三年以前有之御坐申傳也、

■ 口へんに間

史料32. 『西念寺過去帳』 石川県志賀町 羽鳥 (1989) 収録
当国より下松前迄津波

史料33. 『碧雲寺過去帳』 石川県門前町七浦⁽¹⁹⁶⁾ 七浦小学校同窓会編 (1920) 七浦村史 収録

寛保元年七月十九日朝七浦の近海に大海嘯あり、人畜の被害少からず、以上は凡て碧雲寺の過去帳に見えたり、

史料34. 『金相寺過去帳』 福井県南条郡南越前町河野 「右近純一文書」 外

岡慎一郎 (2013) 収録

寛保元年七月廿九日朝五ツ時松前江差大津波(中略)当処ナドシホノ指引上
下スル事六七尺、下浦ハ老尺式尺ホド指引申、昼ノ九ツ時ニ処ル、未曾有ト
云々、

史料35. 『年々跡書帳』 敦賀市市野々 「柴田一男文書」 敦賀市立博物館所蔵

寛保元年^{辛酉}七月十九日、當地大塩こみ、赤川よりこみ杯、

筑屋敷ノ裏^(一)裏^(二)迫さかのほり、海上波もさしてあれす^(三)塩さす也、

此時本松前・江指^(四)にて死人三千人余、舟七十余破損之由、

松前ハ七月十九日と廿四日両日大津波故、右之ことし、本松前家廿七軒

流し、本松前と江指^(五)迄の間之浦々、村ニハ一軒一人も不残

も有之、又ハ一村ニ三三人も残り、家も一二軒も残り候事、

其上大嶋と申山十三日方焼出し、^(六)今ニ火とまり

不申候て、江指^(七)なともくらく、本松前通路も絶

申処^(八)ニ右之津浪、松前^(九)にてハ人心ちも無之段申来候、

委細書付も候へ共、いまたうつし不申候よし、

此七月十九日^(十)ニハ丹後田部・小濱邊も同し事、若刃浦々

同断、のとの輪島と大津波のよし、大變と

いふへき事也

史料36. 『拾樵雑話 卷二十八 異域』福井県小浜市 木崎惕窓著 福井県立図書館・福井郷土誌懇談会刊 (1974) に収録。

九、寛保元年西七月十九日午下剋、小浜町浦急に汐込あり、凡二十間余、しはらくありて引。是までケ様の汐込例なし、人々不審をなす。一ヶ月経て、七月廿三日の書付松前より来る、左の如し。

七月十九日朝六つ時津波いたし城下家共二軒つふれ、懸り舟七十艘残らす用立申さず、舟子死人四十式人。江指にて懸り舟八拾艘の内七十二艘破船、死人百人斗、其外海辺二十九村家残らす人残らす、或は家半分、又は四五軒残るもあり、人も少々残るもあり、凡死人式千人余、委しく末々の浦々には未知候。

十、大島の山、十三四日より焼出し今以て焼候。江指浦は右の焼砂ふり、明る十四日十五日くらやみになり、昼夜共寝不_レ申、大津波も大島の焼ゆへと沙汰仕候。

十一、松前は津軽より海上わたり八里、松前より奥へ廿九里の間松前也。是より下を蝦夷と云、江指は湊添にて松前御館より十五里はかり有。

史料37. 『金村家文書』舞鶴市史 通史編 上, 外岡慎一郎 (2013) に収録。寛保元年西ノ七月十九日小橋村 野原村高浪痛家人拾軒内式拾八軒ハ潰家依之_二小屋かけ材木相願御公儀より願之通_二被遣候繩四百二十束藁五千六百束ハ大庄や八組割_二被仰付候 世間_二たとへ申様_二ハ津浪と申候俄_二出来申し浪差_而大風も吹不申_二出来申波_{二而}候

史料38. 『田村家文書』『瀧洞歴世誌』舞鶴市史 通史編 上, 外岡慎一郎 (2013) に収録。

七月十九日大入村^(大丹生)近所四五ヶ村津波打

史料39. 『本朝天文志』国会図書館 所蔵

寛保元年 辛酉

(略)

七月十

三日松島大嶋焼テ十五日十六日不レ分ニ昼夜^(松前カ)一、如ニ

暗夜一、十九日暁海嘯来^ル、高廿丈許、村里人馬溺

死^レ不^レ知其数^ヲ一

史料41. 『校正王代一覽 後編 卷三 上』(高田義甫, 西野古海編, 大関

克校 千鍾房ほか(1874) 国会図書館近代デジタルライブラリー web公

開.

寛保元年。

(略)

七月。

淀。大水ニテ大小二橋ヲ破ル。十九日。

松前○大津浪ニテ民多ク死セリ。

史料40. 『統王代一覽』東大史料編纂所 所蔵 web公開, 国立公文書館 所蔵

(△寛保元年辛酉)

(略)

七月十三日、奥州松

前大島焼ル、同十四日十五日二天暗冥ニメ

晝夜ヲ分タス、同十八日暁天津浪高キコト甘^(ママ)

餘丈、民家二千餘軒ヲ漂没メ人馬死亡スルコ

ト甚多シ

史料42. 『統皇年代略記』小野 高潔(1747-1829)撰 (早稲田大学中央図書館

所蔵 (請求記号 リ05 02387)、web公開.

寛保元年^{辛酉} 三月 改元

(頭注)

七月十三日松前大嶋

焼十五六日

十九日大波來

史料43・1. 『屋代弘賢覚書追加』 宮内庁書陵部 所蔵 (島根正黨、時世録)』

史料43・2. 『野史^(やし) 第十六卷 本紀 櫻町天皇』 国会図書館 所蔵

(寛保元年辛酉)、

寛保元年辛酉

七月十三日奥州松前大島焼出、十四日、十五日の両日、一天暗冥に

(略) (七月) 十三日乙亥、松前大島火迄二十五日丁丑、

して昼夜を分ち難し、同十八日晚、津浪高きこと三十丈余、其

天色暗濛、不_レ辨_二日夜_一、十八日庚辰夜、海嘯、高三十丈、

響雷の如く、二千余軒を流し、人馬死するもの多し、

響如_二雷_(かいてい)霆_一、人畜死者夥矣、是時形如_レ鯨_者、長十七丈、

○島根正黨時世録_ニ云 此時海中より其形鯨に似たるもの

六七頭揚_レ陸_ニ云。弘賢覚書追加引_ニ、島根正黨時世録_一、

七八頭陸地に打上りたり、長さ皆十七丈に及へり、其名詳

ならずと云、

按に世人津なみと云、其正字を索くに草木志曰、至正戊

子永嘉_ニ大風ク海船吹上_ニ平陸高波上_ニ三三十里、死者千

数人謂之海嘯、

史料44. 『統史愚抄 卷第七十二』 国立公文書館 所蔵 翻刻・経済雑誌社(1902)

『続国史大系 第三卷, 『統史愚抄 卷第七十三』』

史料45. 『慶弘紀聞今日鈔』 卷之第四・五』 国会図書館 所蔵 近代デジタル

タルライブラリー Web公開

十三朝紀聞卷之四

寛保元

(辛酉寛保元年)

元文六年 大歳辛酉

(略)

(略)

(七月) 十九日松前ノ海大ニ溢ル民死者多

七月 大

(略)

十九日辛巳、自去十三日至今日、陸奥松前辺

晦冥大嶋焼出、洪濤如山上陸、人家漂没、

人畜死亡、殆難計云、 年代略記

史料46.『真澄遊覧記』えみしのさえき 菅江真澄著, 内田武志, 宮本常一編

(129) 菅江真澄全集 第2巻(日記2) 未来社

菅江真澄方右ノ記事を記したのは寛政元年五月二十七日ニテ場所ハ渡島国乙部ナ

リ

(1789年5月14日)
(寛政元年四月二十日 赤神・雨垂石)

小島というがいと近う、浪のうへに牛のふせるがごとく、大嶋とやらんは、ひがさの形して、けぶりつねにたへず。此けぶりのいくむすびたちなびくを見て、風はいづこより吹きく、なに風なと見やる。おきべに雁の一つらはるぐくと帰るを、

行かりのつばさやぬれん沖つせの浪もひとつにこじまおほしま

(1789年6月20日)
(寛政元年五月二十七日 乙部)

あまやの軒近う、あたらしき石の碑をおびもて来てすゑたるを、八十あまりの女杖を投捨て、眼などのうとときにや、この石をまきぐりにしつゝ左右の手になでて、あなはかな、あなかなしとて声もすゞろに、よゝとなく。いかなる人のしるしを、かくはしけるとならんといへば、目をすりいらへして、五十とせのむかし、ころは書月(ふみつき)のもちばかり、灰のいたくふりて四方やもの空もくらがりて、昼さへともし火とりて、みの笠にて行かひをしたり。いかなることにてかあらんとおもふをりしも、たがいふとなう、いま五日あらば津浪寄せこん、あなおそろしなぞ口にはいへど、たゞ、うきたることのやうにのみたれもくおぼえたりし

が、かくて十九日の夜、夕やみより盆おどりにさゞめきあひて、暁月夜いと涼しう海てるころまでうかれありくをりしも、ものゝ音せり。こや、なへ(地震)のふるらんとおもふほどに、ふしたる人もみなさはぎたち、とに出るほどもあらで、浪高う、さとうちあぐるに、こは、つなみぞやとて足をそらになきまよひ、山にのぼり、岡にたどるほどもなう、夜はあけがたになりて、すみたる家居は、なごりなう浪にいざなはれて、人もあまた死うせたるなかに、あが父の親は、砂の中にさかさまにかい埋れ、足のみさし出て身まかれり。それを、誰れをさむる人もなうなきをれば、又五日を過なば、かならず乙波といふものよりこんと、人ごといひもてさはぎ、かくて五日の日数もへぬれば廿五日の夜、げにや、はじめにこそをとれ、大波のより来けり。その五十とせのなきあとをとぶらはんため、かゝる石のそとはは建さぶらふ。たのみつかはしし船の、けふつみ来ける。あが父のしるしそとおもふより、むかしのうきめおもひやられて、つとむねのふたがりて、人めもしらず、なきさぶらひし也。なもあみだぼとけと、たなこころすりて杖とりて入ぬ。老らくのなげきになみだおちて、

こやあまの袖よりも猶ぬれにけり見ぬいそとせのむかしがたりに
けふの日もくらぐになりぬ。

渡島大島噴火史料集

平成二十八年(2016)年三月三十一日 発行

編集・発行 津久井 雅志

〒263-8522

千葉県千葉市稲毛区弥生町一・三十三

千葉大学大学院理学研究科

令和三年(2021年)五月三十一日 補訂版 公開

